

佐賀市埋蔵文化財調査報告書第13集

琵琶原遺跡

昭和56年3月

佐賀市教育委員会

び わ ば る
琵琶原遺跡

昭和55年3月

佐賀市教育委員会

挿 図 目 次

Fig.	1、佐賀市及び大和町周辺遺跡分布図	2
	2、SB023住居跡実測図	4
	3、SB031住居跡実測図	5
	4、SB030住居跡実測図	6
	5、SB042住居跡実測図	7
	6、SB050住居跡実測図	8
	7、SB034住居跡実測図	9
	8、SB033住居跡実測図	10
	9、SK010土壌実測図	13
	10、SK008土壌実測図	13
	11、弥生式土器実測図(1)	15
	12、弥生式土器実測図(2)	16
	13、弥生式土器実測図(3)	18
	14、弥生式土器実測図(4)	19
	15、弥生式土器実測図(5)	21
	16、貝ガラ状土器実測図	22
	17、不明土器実測図	23
	18、土師器実測図	24
	19、須恵器実測図	26
	20、石器実測図(1)	28
	21、石器実測図(2)	29
	22、鉄器実測図	30
	23、琵琶原遺跡遺構配置図	折り込み33・34

表 目 次

Tab.	1、堅穴式住居跡一覧表	11・12
	2、琵琶原遺跡出土石器計測表	27

図 版 目 次

PL.	1	1	調査区東北部遺構検出状況
		2	調査区北部遺構検出状況
2		3	調査区南西部遺構検出状況
		4	調査区南部遺構検出状況
		5	調査区南東部遺構検出状況
3		6	SB005住居跡
		7	SB031住居跡
		8	SB023住居跡
4		9	SB031土器出土状況
		10	SB006土器出土状況
5		11	SB030土器出土状況
		12	SB030土器出土状況
6		13	SB033住居跡
		14	SB033土器出土状況
7			SB023、SD007出土土器
8			SB023、SK010出土土器
9			SB006、SB016、SB030出土土器
10			SB011、052、019、050、014、031、032、014、030、006出土土器
11			SB023、SB006、SB028、SB030出土土器
12			SB031、SB051、SB009、SB015、SB023、SK008出土土器
13			SB023、SK003、SB051出土土器
14			SB033、SB041出土土器
15			SB033、SB041出土土器
16			SK003出土須恵器
17			SK003出土須恵器
			琵琶原遺跡出土石器
18		〃	石器、鉄器

序 文

近年、全国的な傾向として土地開発の急激な進展により、文化財保護に関して多くの問題が生じています。これらの状況に対応して開発と保存の調整をはかりつつ、やむをえず破壊せざるをえない遺跡については、事前に調査を行い記録として後世に残し伝えていくよう努めているところであります。

今回の調査地域は、弥生時代から古墳時代にかけての長期にわたって生活が営まれた地域であって、住居跡をはじめ溝、土壌など多様な遺構が検出され、学術的にも非常に重要なものであることが確認されました。

今回これらの調査をまとめ、琵琶原遺跡を刊行することになりました。本報告書が一般市民の皆さんの文化財に対する理解を深め、さらに学術研究など広く活用されれば幸甚に存じます。なお、調査にあたっては、県文化課、凌病院院長凌俊郎氏ならびに地元関係各位に並々ならぬ御理解、御協力を賜り、深甚の謝意を表すものであります。

昭和56年3月31日

佐賀市教育委員会

教 育 長 花 島 広 次

例 言

- 1、本書は昭和55年度国庫補助事業として行われた佐賀市久保泉町琵琶原遺跡の緊急調査報告書である。
- 2、調査は佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
- 3、遺物の復元は野中須矢子、福田敏枝が行った。
- 4、本書の執筆・作成・編集は福田義彦が行った。

本 文 目 次

I 序 説

- 1、調査に至る経過…………… 1
- 2、調査の組織…………… 1
- 3、遺跡の立地と環境
(1)地理的環境…………… 3
(2)歴史的環境…………… 3

II 遺 構

- 1、住 居 跡…………… 4
- 2、溝、土壇、その他の遺構…………… 12

III 遺 物

- 1、土 器
(1)弥生式土器…………… 14
(2)土 師 器…………… 23
(3)須 恵 器…………… 25
- 2、石 器…………… 27
- 3、鉄 器…………… 27

IV ま と め…………… 31

I 序 説

1. 調査に至る経過

佐賀市久保泉町大字川久保字西原琵琶原に特別養護老人ホームを建設するので事前に調査を行ってほしいと市教育委員会に凌病院院長凌 俊朗より調査の依頼があり、さっそく現地へ行き遺物の表面採集を行った。その結果多数の土器片が発見された。そこで凌院長、県文化課、市教育委員会の3者で協議を行い事前の試掘調査を行う事が決定した。

そこで県文化課の指導を受け範囲確認のための試掘調査を行った。その結果弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が全域に広がっていることが判明した。

調査期間

整理期間

自昭和55年4月8日

自昭和55年8月1日

至昭和55年7月23日

至昭和56年1月31日

2. 調査の組織

調査主体者 佐賀市教育委員会

調査担当者 佐賀市教育委員会

事務局 江 副 満 男 (社会教育課課長)

森 田 栄 (社会教育課課長補佐)

北 原 学 (社会教育課文化係長)

小 池 邦 春 (同事務史員)

調査員 北 原 学

小 池 邦 春

福 田 義 彦 (嘱託)

調査協力 佐賀県文化課



Fig. 1 佐賀市及び大和町周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | |
|----------|-----------|------------|-----------|
| 1、帯隈山神籠石 | 9、西原遺跡 | 17、大門古墳群 | 25、惣座遺跡 |
| 2、西原古墳群 | 10、山王古墳 | 18、乱斗山古墳群 | 26、肥前国分寺跡 |
| 3、琵琶原遺跡 | 11、丸山遺跡 | 19、黒土原古墳群 | 27、礫石古墳群 |
| 4、清兵衛山古墳 | 12、藤村遺跡 | 20、西隈古墳群 | 28、銚子塚 |
| 5、神籠池窯跡 | 13、金立開拓遺跡 | 21、権現原遺跡 | 29、前隈山古墳 |
| 6、関行丸古墳 | 14、三本黒木遺跡 | 22、肥前国分尼寺跡 | |
| 7、花納丸古墳 | 15、六本黒木遺跡 | 23、築山古墳 | |
| 8、西原壺棺遺跡 | 16、大門西遺跡 | 24、肥前国府跡 | |

3. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

琵琶原遺跡は佐賀市久保泉町大字川久保字琵琶原に所在する。佐賀平野の北部には、脊振・天山山系の南に存在する一連の小山群の一つ、金立山(501m)から大小の丘陵が派生している。

当遺跡もそれらの丘陵の一つの先端部に位置し、標高は約18mで、付近の水田面との比高は約1mを数える。また、遺跡の西方約1kmに脊振山地を源とする巨勢川がゆるやかに蛇行しながら南下している。

(2) 歴史的環境

遺跡周辺には各時代の多くの遺跡が存在する。旧石器時代の遺構は確認されていないが、久保泉町の藤村E遺跡から台形石器・細石刃、金立町の大門西遺跡からサヌカイト製の尖頭器などが出土している。

縄文時代のものとしては同一丘陵基部の西原遺跡の後期甕棺、西側丘陵の丸山遺跡の支石墓群などがある。縄文期の遺跡は現在のところ数量的には少ないが、多くの丘陵で石器、土器片を採集することができる。

弥生時代の遺跡は大門遺跡、六本黒木遺跡、金立開拓遺跡などがある。また、当丘陵基部にある西原遺跡で特筆すべき弥生期の遺物として、一つ穴の石包丁がある。これは石包丁の双方の面から、こすりうがたれており、県下では他に類例を見ない。

古墳時代になると脊振南麓は古墳群の一大中心地をなす。西方から大門古墳群、黒土原古墳群、乱斗山古墳群、金立開拓古墳群および西原古墳群などがある。また、前方後円墳も造られている。県内屈指の前方後円墳で封土の周りには周濠が設けられ、前方部が低く細長い柄鏡式の形をした銚子塚、鏡などの豊富な副葬品を持った関行丸古墳、遺跡北方約200mに西原前方後円墳(湮滅)などがある。古墳以外の遺構としては現在のところ脊振南麓には少なく、西原遺跡で検出された住居跡数軒がある。また、遺跡北東の帯隈山(177.3m)には神籠石の存在が知られている。この列石は帯隈山をめぐり、東南麓にあたる天童山から鳥越溜池の中間を通り、鳥越山・清兵衛山の南中腹から帯隈山の西斜面・山頂の北側を通り、さらに東側斜面を通って一周する、全長2,400mのものである。神籠石については古くから山城説や祭祀遺跡などの論争が展開されてきたが、現在は一般に山城説が有力で古墳時代後期の築造とされている。

歴史時代の遺跡としては長尾遺跡の高床式住居跡、大門西遺跡の平安期の堅穴式住居跡などがあるが数量的には少ない。しかし、この金立・久保泉地区は肥前国府跡や国分寺・国分尼寺跡からさほど遠くない距離にあり、古代律令国家を研究する上で重要な地域とすることができる。

II 遺 構

琵琶原遺跡では弥生時代から歴史時代までの遺構を確認した。弥生時代の遺構として住居跡、土壇、古墳時代の遺構として住居跡、歴史時代の遺構として溝、土壇がある。調査区のほぼ全面にわたってこれらの遺構を確認した。当地区は調査前は畑地であり、遺構の残存状態は比較的良好であったが、堆積土の薄い南部は桑の根による破壊を受けていた。北部と南部との比高は約0.5mでゆるやかに下がっている。また調査区の北西部には、西方に向けてゆるやかな勾配がありそこにおいて大量の流れ込みの土器を検出した。

1. 住 居 跡

調査区全面にわたって検出し、弥生時代のもの53軒、古墳時代のもの2軒を数える。弥生時代のものは後期から終末期にかけてのものが大半を占め、全体の約半がベッド状遺構をもつ。

ここでは紙面の都合上、特定の時期の特徴をもつ数軒の住居跡の詳細を記し、残部は規模の比較的小さなものの概略を記述する。

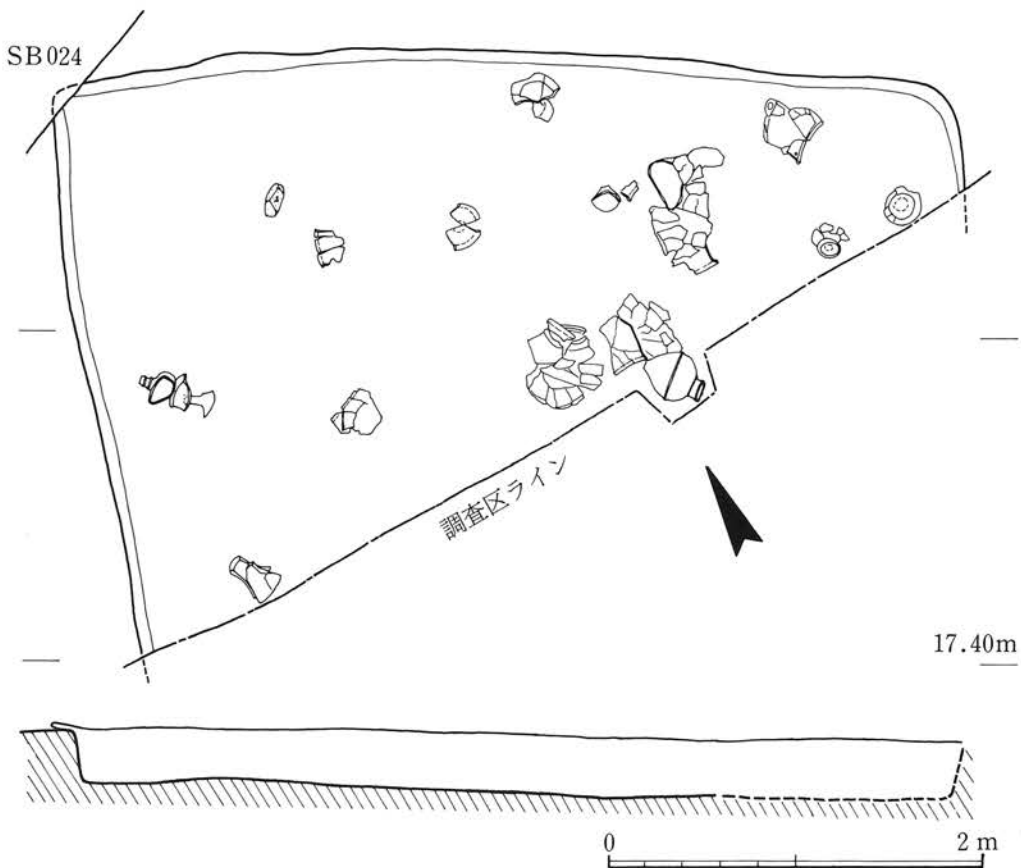


Fig. 2 SB023 住居跡実測図

SB023住居跡(Fig.2)

調査区の南西端に位置し、平面形は長方形の竪穴式住居跡である。長辺4.8m、短辺3 m + α 、深さ0.3mで黄褐色のやわらかな地山に掘り込まれている。床面はゆるやかな起伏がある。炉址、柱穴は検出できなかった。北西隅をSB024に切られている。また、調査区ラインが住居跡の北東部から南西部にかけて走っており、今回の調査では半分の面積の調査しかできなかった。

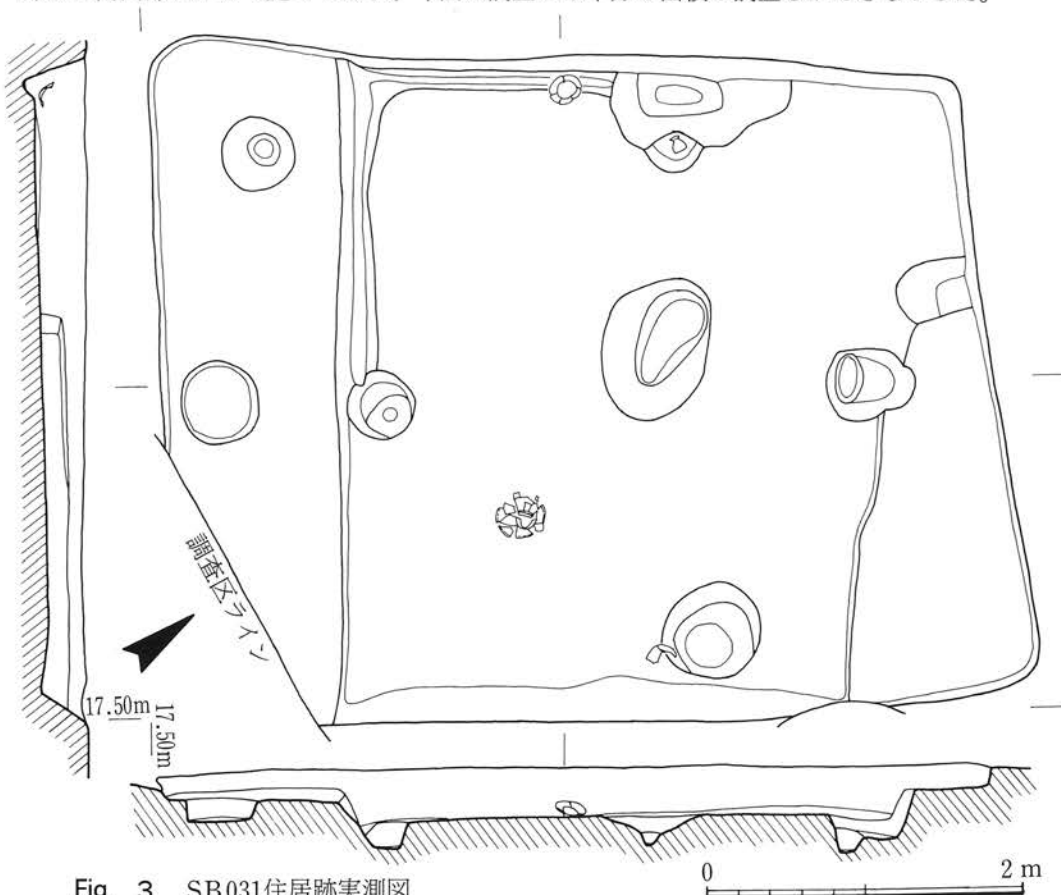


Fig. 3 SB031住居跡実測図

SB031住居跡(Fig.3、PL.3)

調査区の北部に位置し、平面形は長方形の竪穴式住居跡である。長辺5.3m、短辺4.2m、深さ0.3mである。床面は黄褐色の地山に掘り込まれている。ベッド状遺構が北部と南西部に設けられている。前者は長さ4.2m、幅1 m、床面からの高さ0.15mで、後者は長さ2.3m、幅1.2m、床面からの高さ0.2mである。床面中央に長径0.9m、短径0.65mのだ円形のピットがある。炉址と考える。柱穴は両ベッド状遺構に隣接したもの2個と考える。貯蔵穴は東西壁に各々1個ある。側溝は幅0.2m、深さ0.1mで床面北部中央から東部中央にかけて存在し、長さは3.5mを数える。遺物は床面北西部より特殊器台、東壁部貯蔵穴よりミニチュア土器、側溝よりカメ形土器を検出した。

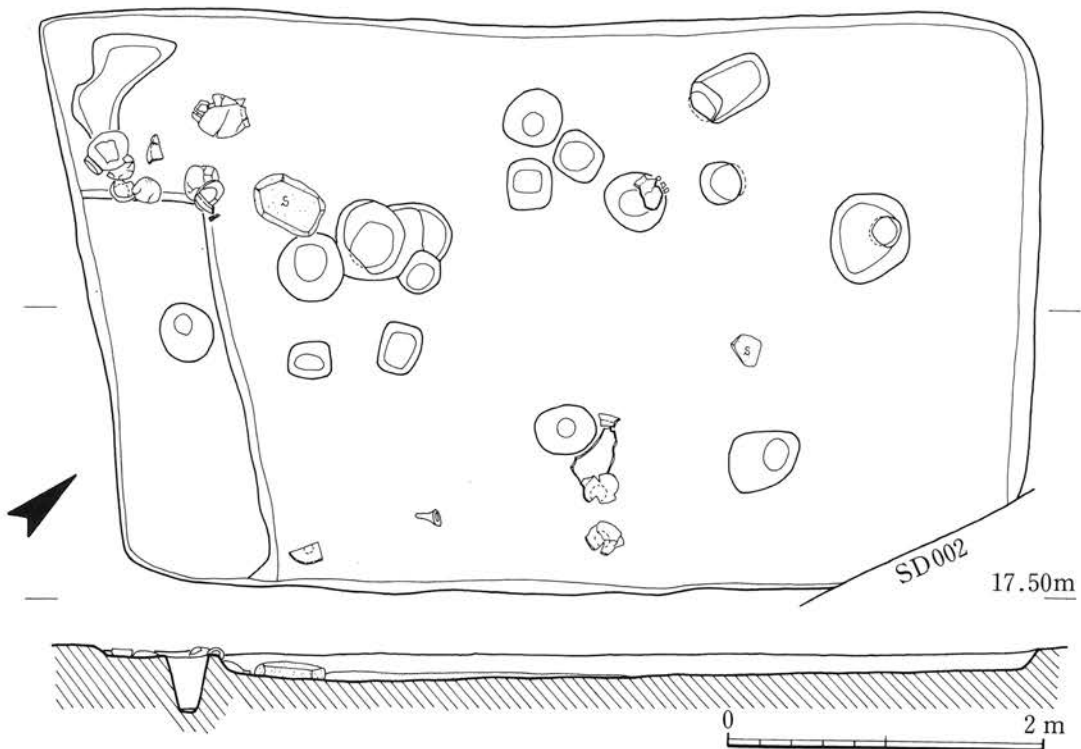


Fig. 4 SB030住居跡実測図

SB030住居跡(Fig.4、PL.5)

調査区の北西部に位置している。平面形はいびつな長方形の竪穴式住居跡である。北東隅をSD-002に切られている。長辺6.20m、短辺3.6m、深さ0.16mである。床面は砂まじりの硬い黒色をおびた地山に掘り込まれ、壁はゆるやかな立ち上がりを見せる。ピットは総数17個あるが、柱穴と考えられるのは石と隣接しているものと最北部にある2個で、2つ柱の形態の住居と考える。東南隅には長さ2.4m、幅0.75m、床面からの高さ0.1mのベッド状遺構が設けられている。南西隅の床面は全体的に低くなっており、その中に不整形のピットが造られている。そのピットとベッド状遺構の西端部との間に土器が集中しており、このコーナーが元来厨房的な場所であったことがうかがえる。また、ベッド状遺構の北西隅付近で残存状態の良好な長さ6cm程度の炭を検出した。

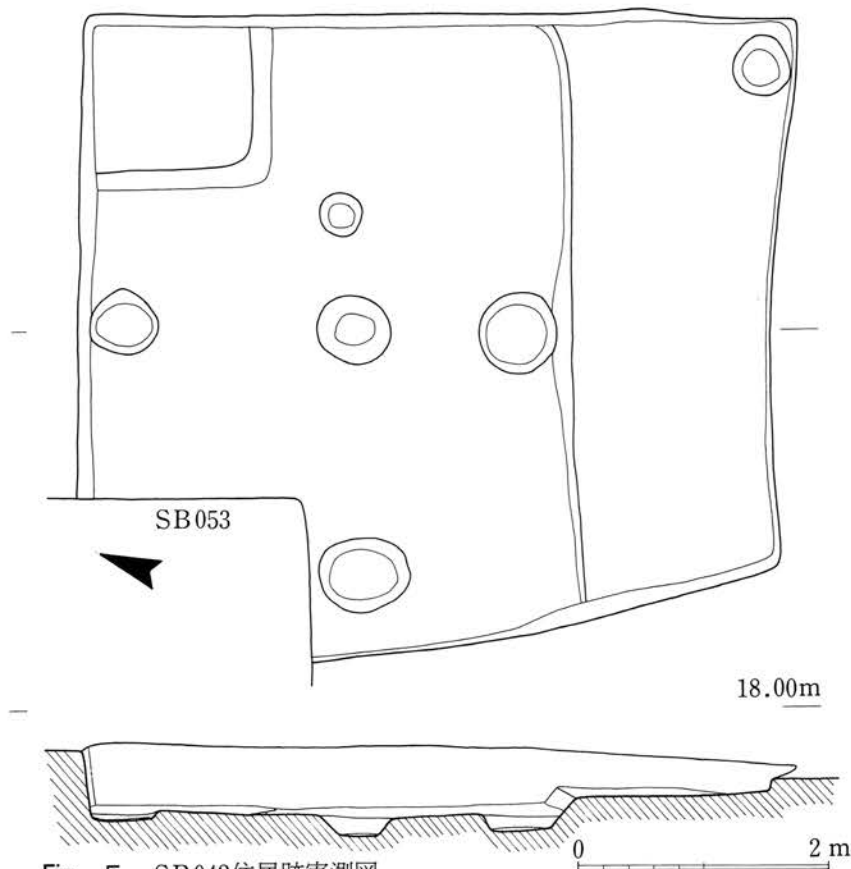


Fig. 5 SB042住居跡実測図

SB042住居跡(Fig.5)

調査区の西部中央に位置する。平面形は長方形の竪穴式住居跡である。北西隅をSB053に切られている。長辺5.5m、短辺5.1m、深さ0.6mである。遺構は比較的やわらかい黄褐色の地山に掘り込まれ、残存状態は良好である。床面は硬く平坦である。ベット状遺構が南壁沿いと、北東隅にある。前者は長さ4.5m、幅1.5m、床面からの高さ0.2mで東西端に比して中央部がやや低くなっている。後者は長さ1.3m、幅1.1m、床面からの高さ0.05mである。北西隅がSB053に切られているが、その部分はSB053でも東南隅のベット状遺構にあたり、偶然に重複している。柱穴は南のベット状遺構中央に接しているものと、北壁中央部にあるものの2つで、2つ柱の形態をした住居と考える。中央部に長径0.6m、短径0.55m、床面からの深さ0.15mの炉址を検出した。西壁部中央に長径0.75m、短径0.6m、深さ0.5mのピットがある。形状、位置関係からして貯蔵穴の性格を有するものと考え。中からは何も検出しなかった。遺物の量は比較的少なく、そのほとんどが埋土上層部から下層部にかけて検出したものである。

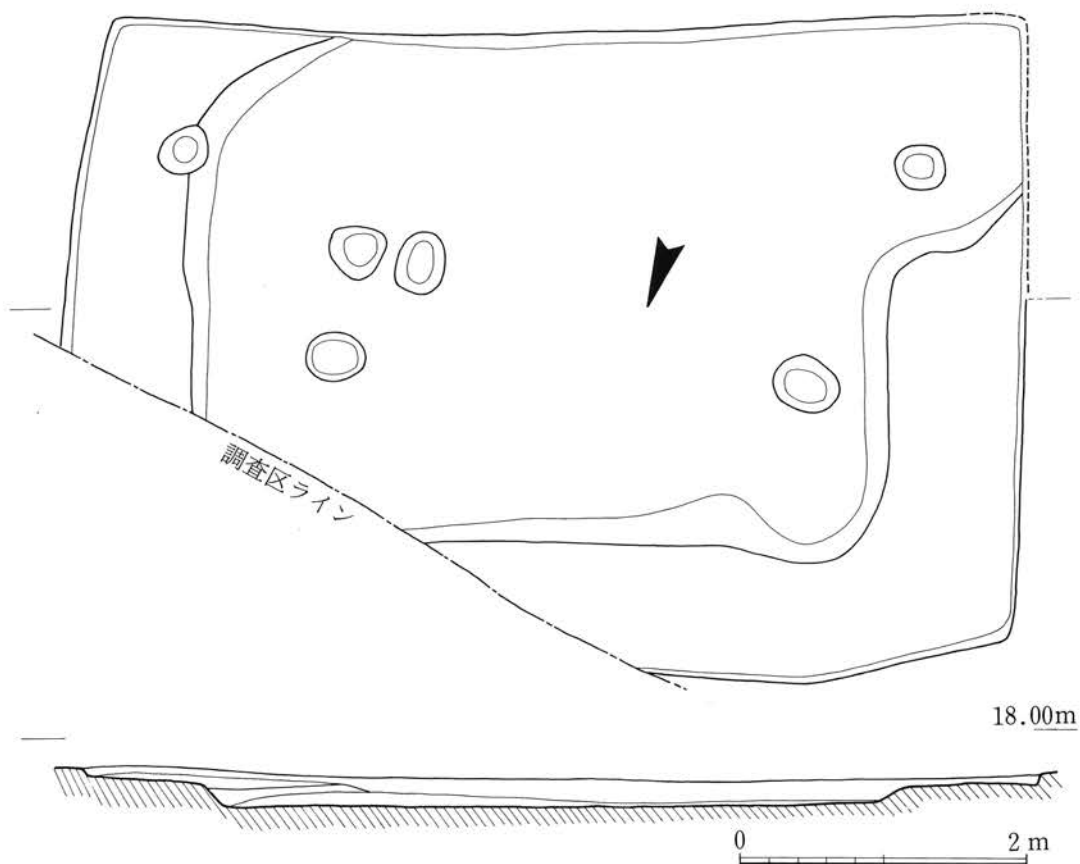


Fig. 6 SB050住居跡実測図

SB050住居跡(Fig.6)

調査区の北部中央に位置する。平面形は長方形の竪穴式住居跡である。調査の関係で全掘には至らなかった。SB036に切られている。長辺6.7m、短辺4.5m、深さ0.2mで、壁は急な立ち上がりをみせる。遺構は淡黄褐色の比較的やわらかい地山に掘り込まれ、残存状態は良好である。ベット状遺構が北壁から西壁にかけてと、東壁部にある。前者は幅0.9m、検出全長5.5m、床面からの高さ0.16mでL字形を呈する。後者は幅0.7m、検出全長2.5m、床面からの高さ0.18mである。双方共に床面からの立ち上がり方はなだらかなである。柱穴は西壁寄り中央部と東壁寄り中央部に、長径0.45m、短径0.35m程度のものを2個検出した。2つ柱の形態をもつ住居と考える。その他に径0.4m程度のピットを4個検出したが、何れも柱穴とは考え難い。遺物は遺構全面にわたって検出したが、いずれも埋土中よりの検出で床直のものは無い。

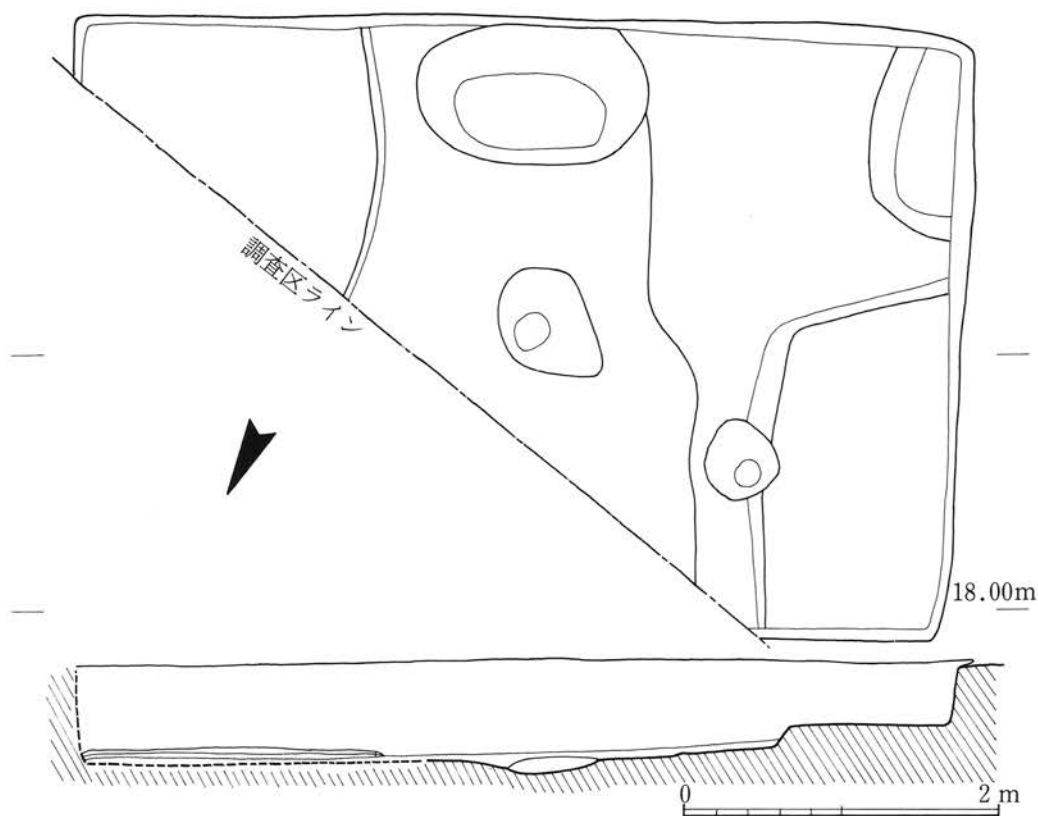


Fig. 7 SB034住居跡実測図

SB034住居跡(Fig.7、PL.3)

調査区の北部中央に位置している。平面形は長方形の竪穴式住居跡である。調査区ラインに北西部から南西部にかけて切られており、今回の調査では全体の約6割の面積を調査した。長辺6.7m、短辺3.8m、深さ0.6mである。住居は黄褐色の比較的やわらかい地山に掘り込まれ、残存状態は良好である。床面は中心部に向かってゆるやかな傾斜を見せている。ベット状遺構は北西隅と東南部に一部検出した。前者は長辺2m、短辺1m、床面からの高さ0.15mで南北に長いびつな長方形を呈する。ピットは計4個検出したが、柱穴と考えられるのは北西隅のベット状遺構と接しているピットである。ピットの位置がやや北壁寄りであるが、その位置関係からして2つ柱の形態の住居と考える。床面の中心部には長径0.8m、短径0.5m、深さ0.1mの不整形のピットを検出した。焼土を微量検出したので炉址と考える。また、貯蔵穴的性格をもつと考えられるピットを南壁中央と南西隅に検出した。前者は長径1.45m、短径0.9m、深さ0.15mで、後者は長径1.2m、短径0.5m、深さ0.15mである。双方共に若干の土器片を検出した。

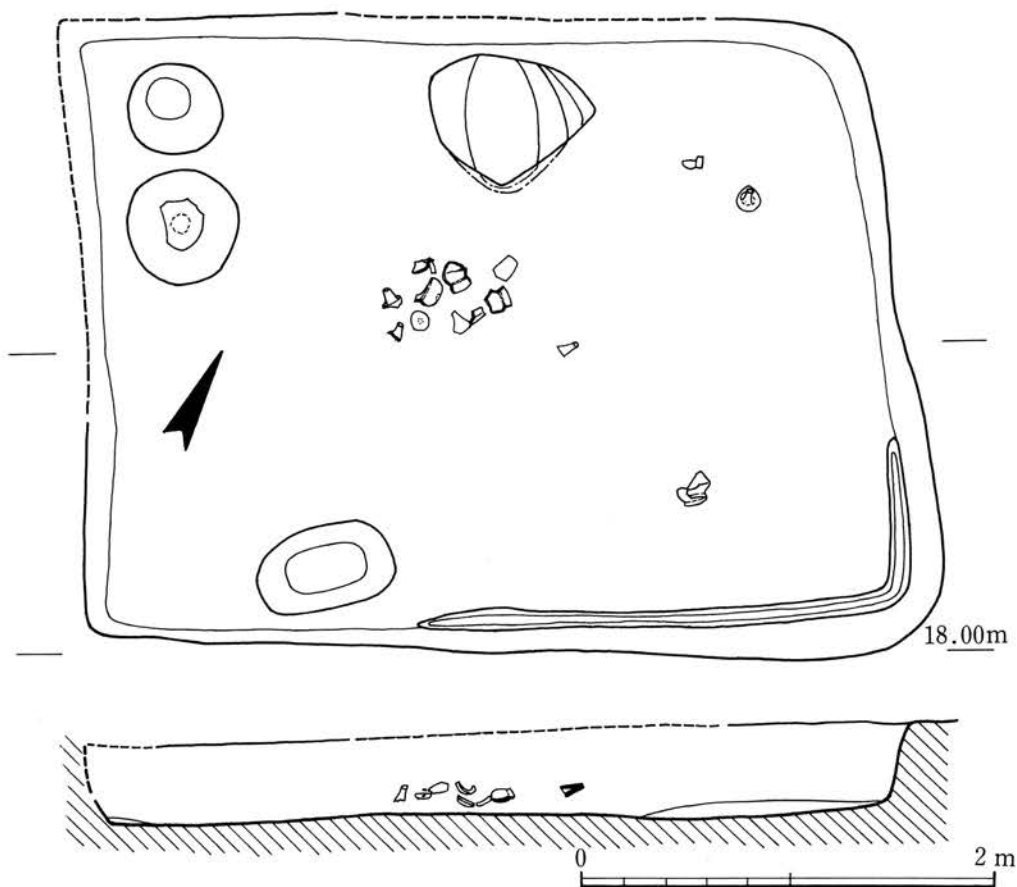


Fig. 8 SB033住居跡実測図

SB033住居跡(Fig.8、PL.6)

調査区の北部中央に位置している。平面形は長方形の古墳時代の竪穴式住居跡である。西壁を試掘調査時のトレンチに切られ、北壁の一部を土壌状のものに切られている。長辺3.8m、短辺3.0m、深さ0.4mである。遺構は硬い黒色を呈する砂まじりの地山に掘り込まれ、残存状態は比較的良好である。床面は中心部がわずかに高くなっており、各コーナーに向かってゆるやかな傾斜をみせている。ピットは4個検出したが柱穴と考えられるものは無い。北壁部中央には長径0.8m、短径0.6m、深さ0.5mの不整形ピットがある。南北にやや袋状になっている。中からは土器片を微量検出した。北壁の一部から東壁にかけて幅0.1m、深さ0.05mの側溝が長さ3mにわたって造られている。床面の中央部より土師器を検出した。小型のカメ形土器や高坏が主体となっている。また、調査区東部にも古墳時代の住居跡SB041を検出したが、規模、土器の種類も似かよっている。

Tab. 1 竪穴式住居跡一覧表

住居跡 番号	規 模 (m)			施 設	備 考
	長辺	短辺	残存壁高		
SB 001			0.2	南壁中央にピット	ピットより鉢形土器
002			0.50		SD 001、SK 001に切られる 床面が荒れている。
003	4.3	3.9	0.25	ベット状遺構、ピット 1	SD 001に切られる
004	4.2		0.25		
005	5.3	3.5	0.2	ピット 3	SD 001に切られる
006	7.0		0.3	土壇、ピット 5	SD 001に切られる 砥石
007	7.0		0.3	ベット状遺構、柱穴 2	SB 006に切られる 鉄片
008	5.9	4.5	0.2	炉址、ピット 1	SD 001と SB 009に切られる
009	5.2	3.7	0.25		SD 001と SK 003に切られる 石包丁
010	5.2	5.0	0.2	ベット状遺構、ピット 2	SB 009と SB 011に切られる
011	5.6		0.25		
012	5.0	4.7	0.1	ピット 5	SD 001と SB 010に切られる
013		3.7	0.3		SD 001と SB 014に切られる
014	4.6	4.2	0.35	土壇、ピット 4	SB 015に切られる
015		3.5			SK 006に切られる
016	4.8	3.2	0.2	ベット状遺構、ピット 3	SD 001に切られる
017	4.5		0.25		
018		4.5	0.3		SK 006に切られる
019	5.2	3.6	0.2	柱穴 2	SD 012に切られる
020	5.6	4.0	0.15	ベット状遺構、柱穴 2	中央部より甕形土器
021			0.2		
022	7.0		0.5	ベット状遺構、土壇 1	
023	4.8		0.3		土器
024			0.2	ベット状遺構、炉址	SD 004に切られる
025			0.2	ベット状遺構	
026			0.2		
027	4.2	3.3	0.25		SD 001と SB 025に切られる 不明土器 1
028			0.1	ベット状遺構、ピット 1	床面が荒れている
029	6.5	4.2	0.1		甕形土器
030	6.2	3.6	0.16	ベット状遺構、柱穴 2、 炉址	SD 002に切られる
031	5.3	4.2	0.3	ベット状遺構 2、柱穴 2、 貯蔵穴 1、炉址	

住居跡 番 号	規 模 (m)			施 設	備 考
	長辺	短辺	残存壁高		
SB 032	6.1	4.2	0.25	土壇	
033	3.8	3.0	0.4	ピット4、側溝	中央部より土器
034	6.0	3.8	0.6	ベット状遺構、柱穴1	
035	4.0	3.1	0.1	ピット2	
036	4.0	2.5	2.2		SB 035に切られる
037	5.0		0.2	ベット状遺構	
038		3.3	0.1	ピット4	
039	5.0	3.8	0.1	炉址	
040	4.7	3.9	0.2	ベット状遺構、ピット2 土壇2	SB 041に切られる
041	3.2	2.9	0.1		小形丸底埴、カメ形土器
042	6.0	5.0	0.5	ベット状遺構、柱穴2 炉址	SB 053に切られる
043	3.9	3.3	0.15	ピット3	
044	4.5	3.7	0.2		SK 011に切られる
045	5.7	3.0	0.2		SB 043に切られる
046	6.3		0.2	ベット状遺構	
047		2.5	0.3		SB 049、052と切れ合っている
048			0.1		
049	4.6	4.2	0.2		SB 051と切れ合っている
050	6.3	4.5	0.2	ベット状遺構2、柱穴2 ピット3	SB 036に切られている
051			0.15		不明土器1

2. 溝・土壇その他の遺構

住居跡以外の遺構で検出されたものとして、溝5条、土壇12基、ピット等がある。

SD001溝

調査区の西部中央から始まり、SB020付近で東方に向きを変え東南隅に走る。最大上場幅0.4m、下場幅0.3m、最深部0.25mで検出全長約83mである。埋土は黒色を呈しやわらかい。断面はU字形で壁は急な立ち上がりをみせる。遺物は弥生式土器に混じり土師質土器を数点検出した。遺構の切れ合い関係、土師質土器の特徴からみて奈良期のものとする。

SD002溝

調査区北西部から南に延び、SB020の東1m付近で方向を変え、SD001とほぼ平行して東に走

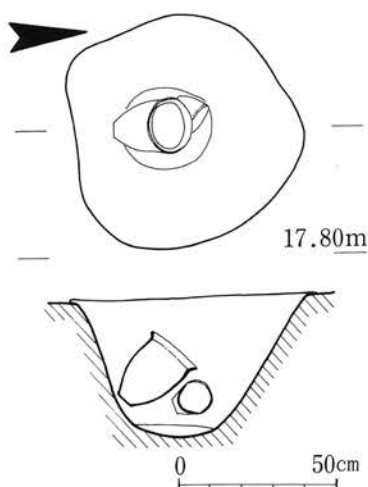


Fig. 9 SK010土壌実測図

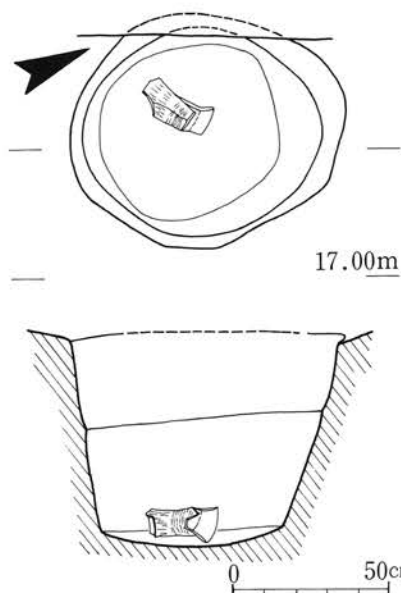


Fig. 10 SK008土壌実測図

る。SD001よりもやや鋭角的に向きを変えている。最大上場幅4.0m、下場幅3.0m、最深部0.6mである。検出全長は約77mである。時期は出土遺物からみてSD001と大差ないものとする。

SK010土壌(Fig.9)

調査区の北東部に位置する。平面形は不整形である。黄褐色のやわらかな地山に掘り込まれ、断面はU字形を呈し壁はゆるやかに立ち上る。径0.7m、底部径0.28m、深さ0.45mである。下層部よりカメ形土器と鉢形土器を完全な状態で検出した。貯蔵穴の性格を有するものと考えが、この遺構と同時期の住居跡は付近に検出しなかった。

SK008土壌(Fig.10)

調査区の東南部に位置する。平面形は不整形である。西端をSD003溝に切られている。径0.85m、底部径0.5m、深さ0.65mである。断面はU字形で掘り込み下0.25m付近に稜がある。底面はやや中央部が低くなっており、壁は急な立ち上がりを見せる。底面のほぼ中央部より器台を検出した。

SK003土壌

調査区の南部中央に位置する。平面形は不整形の楕円を呈する。SB009を切りSD001溝に南部掘り込みを切られている。長径5.0m、短径3.0m、深さ約1mで、黒褐色系の砂まじりの地山に掘り込まれている。壁は北部と南部が急な立ち上がりを見せ、東部、西部はややゆるやかな立ち上がりである。埋土は基本的には6層に分かれている。3

～6層より大量の須恵器を検出した。これらの須恵器はすべてわれており、投げ込まれた様相を呈する。他の遺物として弥生式土器片、土師器、鉄器などがある。また、3層～5層にかけて焼土、炭を微量に検出した。

III 遺 物

1. 土 器

住居跡、土壌及び調査区北西隅の落ち込み部分、全域の堆積土から検出されている。遺物を伴う遺構は小さめのピットを除く以外のもので、その量も莫大なものであるが、紙面の都合上、各時期を代表する、いくつかの遺物にしぼり説明をしたい。

(1) 弥生式土器

土器は壺形土器・甕形土器・鉢形土器（以下壺・甕・鉢と略す）・高坏・器台・支脚・坏・ミニチュア土器などがある。壺は壺AⅠ・AⅡ・B・C、甕は甕AⅠ・AⅡ・AⅢ・B・C・D・E、鉢は鉢AⅠ・AⅡ・BⅠ・BⅡ・C・D、器台は杢形器台・器台・特殊器台に分類できる。時期的に見て後期初頭から終末期にかけてのものとする。

壺AⅠ(Fig.11—1・2)口径15.4cm、器高37cm、底部径8.5～9.5cm、最大径29.3～31.5cmの袋状口縁をもつ壺である。胴部と頸部に各々一条の凸帯を有する。口縁部は内外共にヨコナデ、外面頸部下は全体的にハケ目があり、内面はナデで調整している。胎土は黄褐色で砂粒を含む。1は赤色顔料が一部に残っている。

壺AⅡ(Fig.11—4・5)口径10～13cm、器高23.8cm、底部径6.5cmである。1・2同様袋状口縁を持ち頸部と胴部に突帯を1条ずつもつ。4は頸部が3に比して短い。口唇部は丸みをもち内側に弯曲する。口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はナデ上げ、外面はハケ目調整をしている。胎土は基本的には黄褐色で、3が精選した粘土を使用しているのに対し、4は砂粒を含み焼成も良くない。

壺B(Fig.11—3)口縁部と底部が欠損している。残存高18cm、胴部最大径20cmである。頸部上半に2条、下半部に4条、胴部に3条の突帯を強いヨコナデにより造り出している。外面にハケ目が施されているが、頸部はナデ上げによりわずかに痕跡をとどめるにすぎない。口縁内面はハケ目、頸部は2段階にわたってのナデ上げ、胴部内面はヨコナデをしている。

壺C(Fig.11—6)口径11.0cm、器高13.5cm、底部径7cmである。最大径は胴部に有り21cmである。胴部中央に4条の突帯を有する。口縁部は垂直な立ち上がりをもせ、口唇部は平坦である。外面は口縁部から胴部にかけてヨコナデ、胴部から底部にかけてハケ目を施している。内面は口縁部ナデ上げ、胴部上半をヨコナデ、下半部をナデ上げている。胎土は淡赤褐色を呈し砂粒を多く含む。

甕AⅠ(Fig.12—1)口径17.0cm、残存高19.8cmで底部を欠損しているが平底であったと考えられる。口唇部断面が三角形を呈し、大きさの割には肥厚である。頸部に径1.5cmの孔を4方に有する。共に焼成前の外部からの穿口である。口縁部内外面共ヨコナデ、胴部外面は3段階のハケ目調整、内面ナデ上げをしている。胎土は黒褐色で細かい砂粒を含む。焼成はあまり良くない。

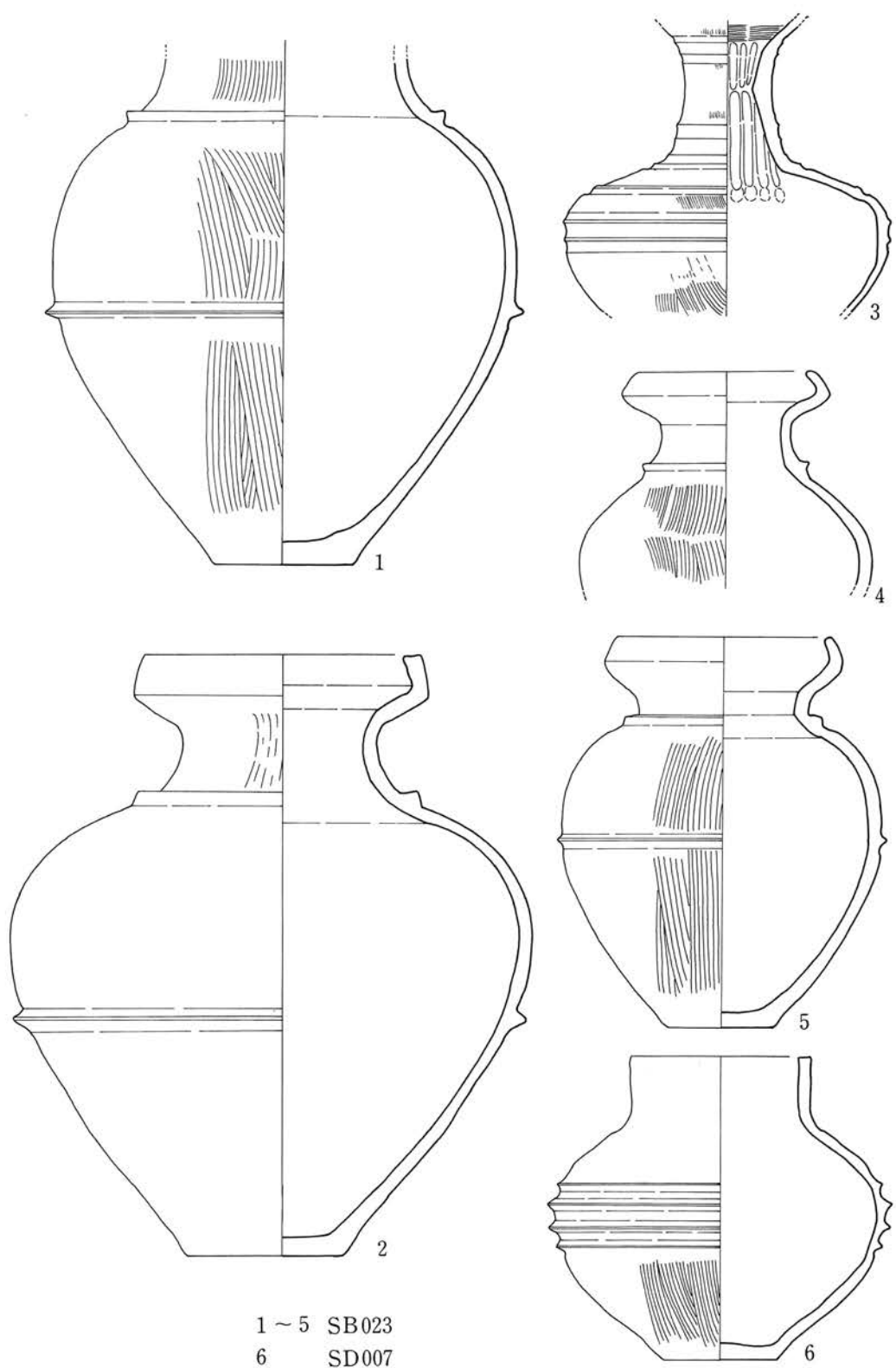
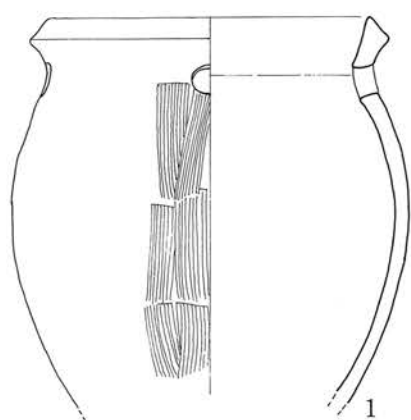
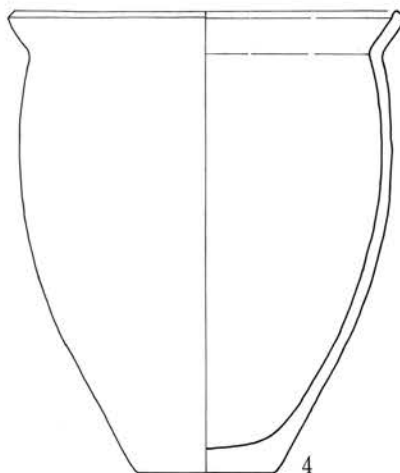


Fig. 11 弥生式土器実測図(1)

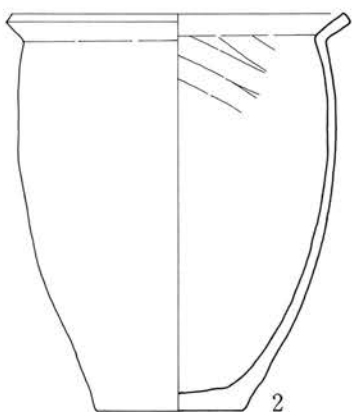
0 20cm



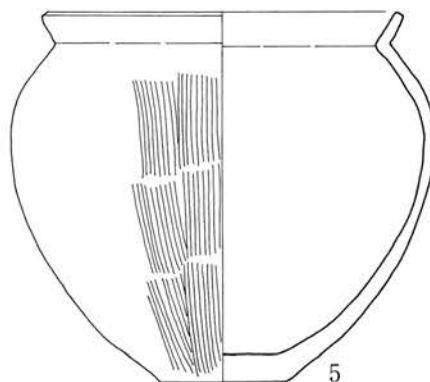
1



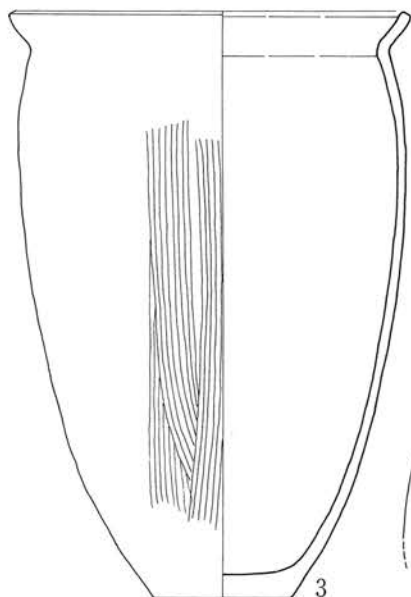
4



2



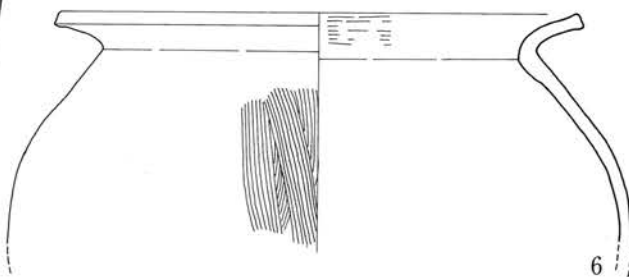
5



3

1, 3~5 SB023

2 SK010



6



Fig. 12 弥生式土器実測図(2)

甕AII(Fig.12—2・3・4)口径17.5~20.5cm、器高21.0~31.0cm、底部径7.3~7.8cmである。全体的にみて胴長である。口縁部はわずかに内弯する。口縁部内外共にヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラ状のものによりナデ上げの調整をしている。煮沸用の土器であり胴部外面にはススの付着が著しく、ハケ目も見えにくい。内面は淡黒褐色、黄橙色を呈す。胎土は淡褐色で比較的精選されたものの中に砂粒を混入している。焼成は良好である。

甕AIII(Fig.12—5)口径18.5cm、器高19.5cm、底部径6.5cmで約半分を欠損している。口縁部はAIIとよく似ているが、器高が低く全体的に丸みをおびている。最大径は肩部に有り、22.1cmである。口縁部はわずかに内弯している。調整は口縁内外共にヨコナデ、胴部外面を3段階のハケ目、内面をナデ上げている。胎土は淡黄褐色で精選された粘土を使用し、砂粒を混入している。焼成は普通で磨滅が進んでいる。また、肩部外面に赤色顔料がわずかにみられる。

甕B(Fig.12—6)口縁部径22.4cmで約7割を欠損している。残存器高12.3cmで最大径は胴部にあり33.0cmである。胴部の張りがAIIIと似かよっているが、口縁部が外部にねじまげられた様相を呈し外反する。口縁部は横方向のハケ目、頸部ヨコナデ、胴部外面細かい縦方向のハケ目、内面ナデを施している。胎土は精選された粘土に砂粒を混入している。焼成はあまり良くない。内外面共に磨滅が著しい。器面の一部に赤色顔料がわずかにみられる。

甕C(Fig.13—1・2)口径21.8~24.2cm、器高40cmである。2は径3.6cmのせまい平底を有する。口縁はやや外反し内外頸部に稜を有する。最大径は口縁部にあるが、胴部と大差ない。口縁部は内外共に縦もしくは斜め方向のハケを有する。胴部外面上半はタタキ、下半部は1がヘラズリ、2がヘラミガキ、内面はハケ目を施している。この種の甕は数多く出土しており、特に胴部外面の調整は変化に富んでいる。上述以外にも、格子目のタタキを有するものやハケ目、タタキ、ヘラケズリの占める面積が均等であるものなどがある。胎土は淡褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は普通である。煮沸用であり、一部に二次焼成の痕跡を認める。

甕D(Fig.12—3)口径14.2cm、器高12.6cmである。底部は平底の痕跡をわずかにとどめている。約半分を欠損している。口縁はわずかに外反している。最大径は胴部に有り13.3cmである。口縁部は内外共に力強い細かなハケ目を施したあと、指で押圧を加え、手握土器の様相を呈す。胴部外面は全面にタタキを施したあと胴部中央から口縁部にぬける力強いハケ目を施し、最大径の付近でヘラケズリをし、上半部と下半部を分けたようになっている。内面はナデ上げのあと特定の間隔をおいて細かく力強いハケ目を施している。胎土は淡橙色で砂粒を混入している。

甕E(Fig.13—4・5)口縁径10.7~13.4cm、器高28.4~29.3cmである。4は頸部に一条の突帯を有し、底部は平底のなごりをみせている。口縁部内外面共にハケ目を施したあとヨコナデをしている。胴部外面は上半部がタタキ、下半部がヘラケズリ、内面は上半部が目のあらいハケ、下半部が細かなハケ目を施している。5は外面上半部のタタキを縦方向のハケで消している。内面はハケ目とナデ調整をしている。

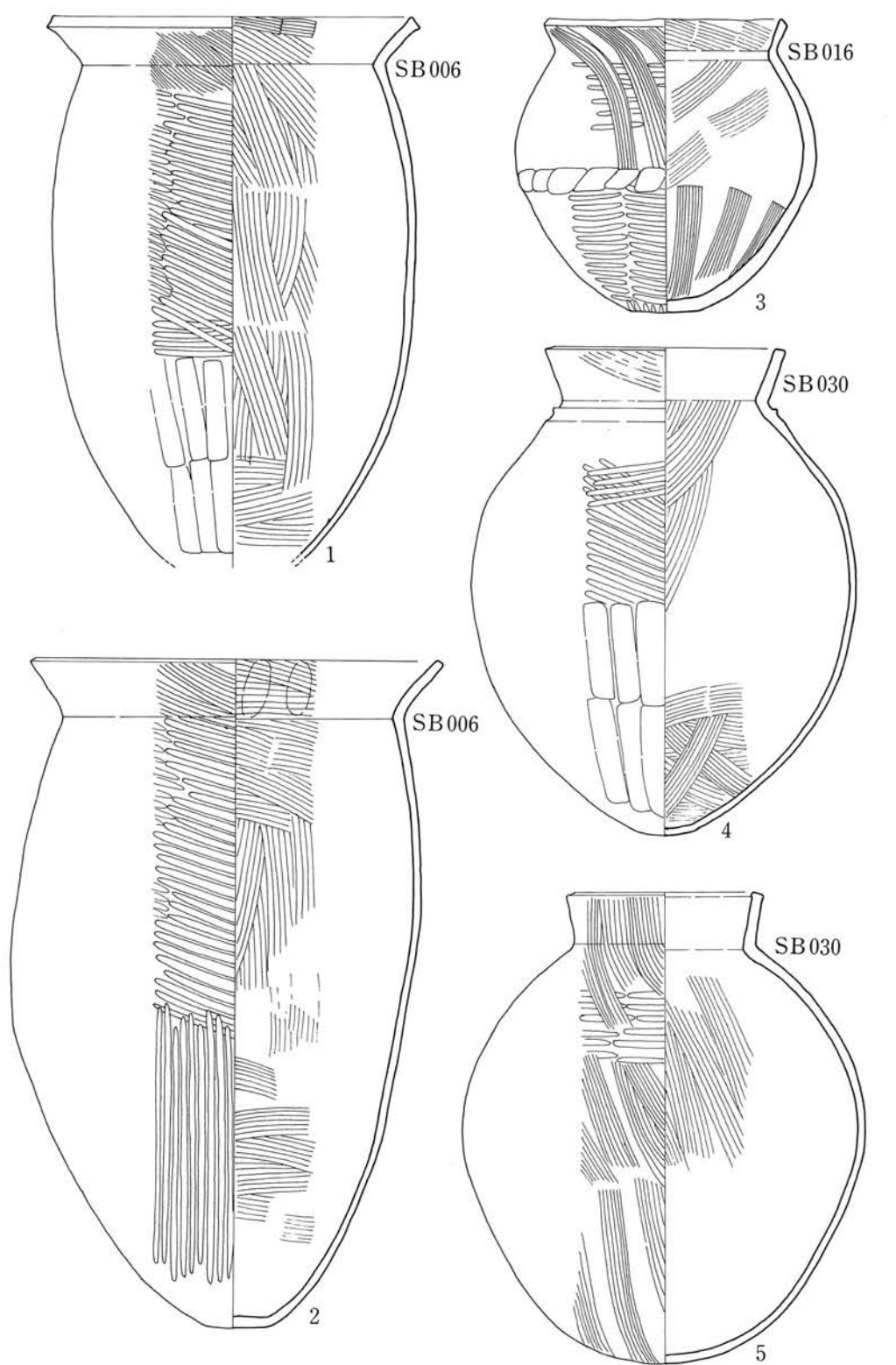


Fig. 13 弥生式土器実測図(3)

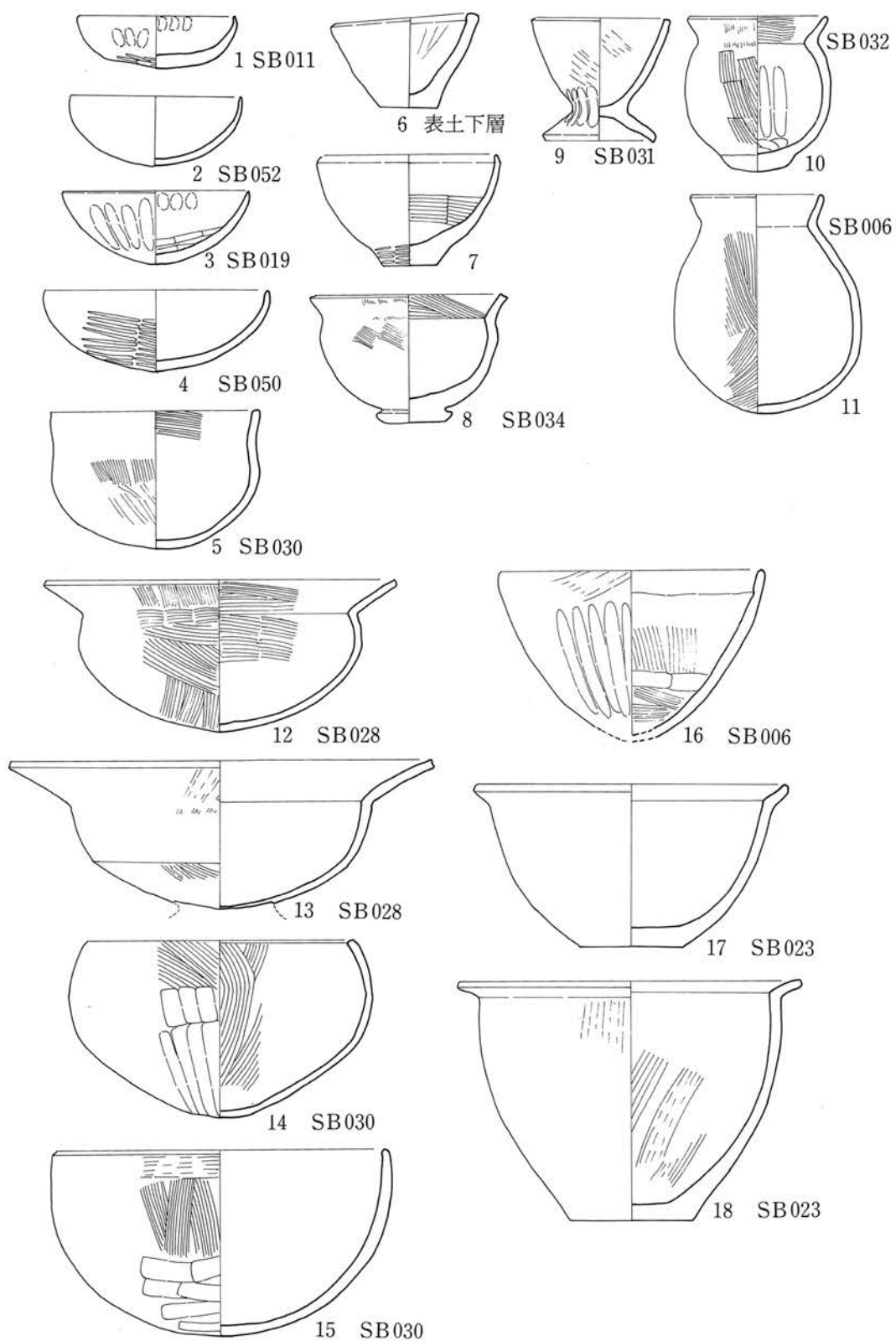


Fig. 14 弥生式土器実測図(4)

坏(Fig.14—1～4)口径4.8～9.1cm、器高3.3～5.0cmである。主としてナデ調整を施している。4は外面下部においてヘラミガキがなされている。

椀(Fig.14—5)口径13.2cm、器高8.6cmである。口縁はほぼ垂直な立ち上がりを見せる。口縁下部2cm付近がわずかに内面に彎曲している。口縁部内外面共にヨコナデ、器内面ハケ目のあとヨコナデをしている。外面には縦方向のハケ目調整、その下部はヘラミガキを施している。

鉢A I (Fig.14—12)口径22.0cm、器高9.5cmで底部は丸底である。口縁部はやや外反し、口唇部に一条の沈線がある。調整は主としてハケを用いているが、内面底部はヘラ状のもので不特定方向ヘナデている。

鉢A II (Fig.14—13)口径26.5cm、残存器高9.3cmである。底部の剝離の状態からみて高台がついていたと考える。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部に一条の沈線がある。口縁部は主として内外共にヨコナデ、胴外面上半部はたんねんなミガキにより下半部のハケ目との間に稜を造り出している。内面もミガキをかけている。

鉢B I・B II (Fig.14—14・15)14は口径11.8cm、器高11.2cmで底部に平底のなごりがある。口縁部は内彎する。調整は主にハケ目とヘラケズリをしている。15(B II)は口径20.7cm、器高11.6cmで丸底で整った半円を描く。外面ハケ目とヘラケズリが施されているが、14の縦方向のヘラケズリに対して横方向である。内面は不特定方向へのナデが施してある。

鉢C (Fig.14—16)口径15.5cm、残存器高10.5cmで底部は尖りぎみの丸底と考えられる。土器形成の際、口縁部を折りまげた痕跡がある。口縁部はハケ目及びナデ、下半部外面ヘラケズリ、内面に主としてハケ目を施している。

鉢D (Fig.14—17・18)18は口径20.5cm、器高15cm、底部径7.7cmである。口縁部は短く外反する。内外面共にハケ目とヨコナデ調整をしているが、磨滅が進んでおり明瞭でない。胎土は17の黄褐色に対し、赤色で砂粒を多く含む。焼成は良好である。17は口径19.4cm、器高10.2cm、底部径6.5cmである。口縁部が内彎し底部はわずかに上げ底状を呈す。調整は主としてナデが施されている。

ミニチュア土器(Fig.14—6～11)鉢形のものや甕形のものに大別できる。鉢形のものに高台付きのものやそうでないものがあり、前者は口径8.7～11cm、器高5.5～7cm、底部径3.4～3.7cmで後者は口径8.7～11.7cm、器高7.7～8.1cmである。

高坏(Fig.15—1～3)3の坏部は外側へ突出する平坦口縁をもち、比較的浅いものである。口縁部外径25.6cm、器高17.5cm、脚部径15.3cmである。器面は内外共に磨滅が著しく、外面のハケ目の痕跡がわずかに残っている。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はあまり良くない。1・2は脚部のみである。脚部径14.4～14.7cm、残存器高13.9～14.4cmで双方共に支脚部とすその間に径0.5cm程度の焼成前の穿口を1個ずつ有する。胎土は精選された粘土を使用し、淡赤色を呈す。

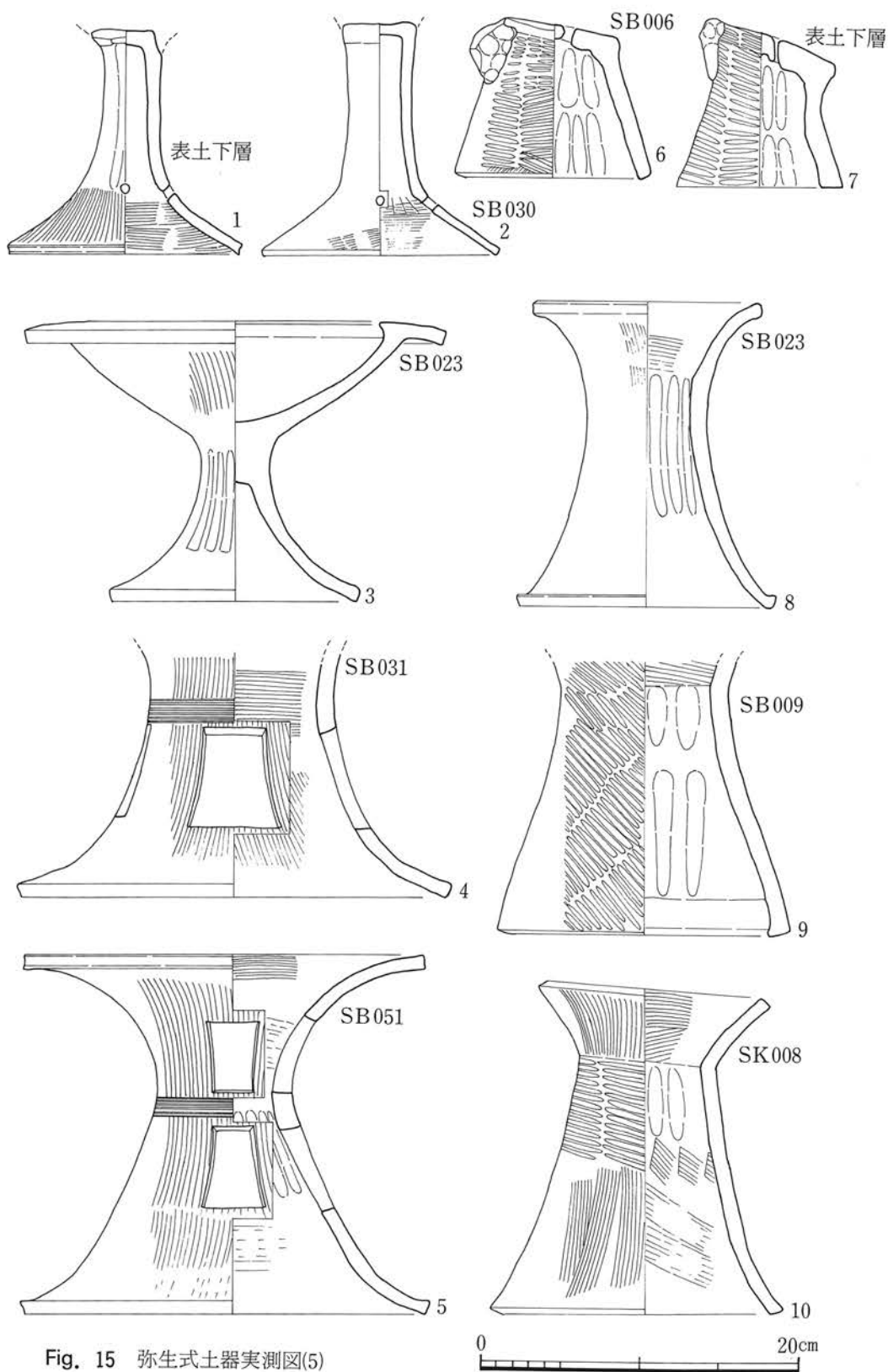


Fig. 15 弥生式土器実測図(5)

杓形器台(Fig.15—6・7) 受部径6.9～7.5cm、器高9.6～9.7cm、底部径1・0.4～12.4cmである。受部の一方が高くなっている。また、土器形成時に指頭圧によりつまみ部を一箇所に設けている。外面をタタキ、内面を主に指頭圧によるナデ調整をしている。

器台(Fig.15—8・9・10) 8は受部径14.4cm、器高19.2cm、脚部径16cmである。脚部から受部に向けてゆるやかな立ち上がりをみせ、受部と脚部の境が明確でない。調整は外面ハケ目を施したあとナデ、内面は受部にハケ目、脚部上半を指頭圧、下半部を横方向のナデが施されている。10は受部径13.7cm、器高20.5cm、脚部径16.8cmである。受部は一方向に傾いており、受部と脚部の境に明瞭な稜を内外面共に有する。外面は受部を縦方向のハケ目、脚上半部をタタキ、下半部を縦方向のハケ目が施されている。内面は受部を横方向のハケ目、脚上半部を指頭圧による調整、下半部にハケ目調整をしている。

特殊器台(Fig.15—4・5) 4は受部を欠損している。脚部径26.8cm、残存器高15.2cmである。台形の透しが4方に設けられている。上辺4cm、下辺6.1cm、高さ6.2cmである。透し上部には幅1.5cmの間に6条の沈線が横方向に施されている。外面は縦方向のハケ目、内面は上部に横方向、下部に縦方向のハケ目がそれぞれ施されている。5は受部径25.1cm、器高22.7cm、脚部径25.3cmである。受部下方に下辺3.4cm、上辺2.6cm、高さ4.4cmの逆台形の透しが3方に、脚部に上辺2.7cm、下辺4.1cm、高さ5.1cmの台形の透しが3方にそれぞれ設けられている。両透しの間に幅1.2cmの間に6条の沈線が施されている。4に比してスマートな印象をうける。外面は縦方向のハケ目、内面は受部に横方向のハケ目、脚上部を指頭圧による調整、下部を横方向のハケ目調整をしている。

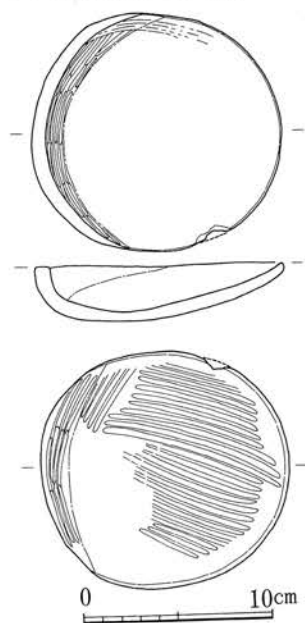


Fig. 16 貝ガラ状土器実測図

貝ガラ状土器(Fig.16) 長径13.2cm、短径12.5cm、器高3cmである。一見すると丸底の甕形土器の底部をハスに切った様相を呈する。しかし、端部は削りとられたものではなく土器形成時のものであることが明確に残っている。「貝ガラ」という言葉を使ったが形成時に貝を意として造ったものではなく、あたかもあわび貝の形状を連想し得るものであったため、便宜上この言葉を使用することにする。この土器の用途を考えるなら、升・杓的な使用方法がその形状より窮える。弯曲部の深さからしても、液体をくみ上げるには不都合で、むしろ穀物のようなものをすくい上げたのではないだろうか。しかし端部にはその使用痕は無く、使途に関しては想像の域を出ない。調整は外面をタタキとヘラミガキ、内面を主にヘラミガキとナデによっている。この土器はSB027の埋土より検出したものである。時期的には供件した他の土器からみて弥生後期半～終末のものとする。

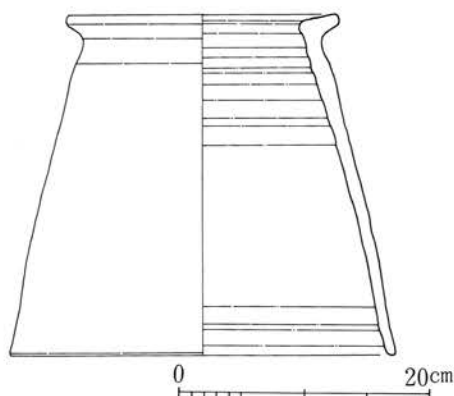


Fig. 17 不明土器実測図

不明土器(Fig.17)甕形土器の様相を呈するが、下部は打ち欠いたものではなく土器形成時のものである。器高27cmで、完全な回転体と考え、上部径10.7cm、下部径15.3cmである。調整は主にヨコナデがなされている。胎土は砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。この土器はSK003の埋土中より須恵器にまじって検出したものである。

(2) 土 師 器

主にSB033、041より検出した。他に埋土中より数点検出したが細片で器種は明確でない。

甕形土器A I、A II、B、小型丸底埴、手捏土器、高坏がある。

甕形土器A I(Fig. 18—1)口径13.1cm、器高10.5cmで丸底である。口縁部の内外面を指頭圧により調整し、手捏土器の様相を呈する。胴部外面をハケ目、内面をヘラケズリがなされている。

甕形土器A II(Fig. 18—2～6)口径12.3～15cm、残存高は残りのよい2で13.5cmである。調整は基本的には、外面をハケ目、内面をナデとヘラケズリがなされている。

甕形土器B(Fig. 18—7)口径15.9cm、残存高15.5cmで胴下半部を欠損している。最大径は胴部に有り27.8cmを数え、全体的に見て丸みをおびている。口縁部はわずかに外反している。口縁部内外面をハケ目のあとヨコナデ、胴部外面を縦方向のハケ、内面をナデ上げとヘラケズリで調整している。

小型丸底埴(Fig.18—8・9)いずれもSB041から検出したものである。8は口径8.7cm、器高7.8cmである。口縁部はわずかに外反し、胴部に丸みをもつ。口縁部内外面にハケ目を施したあとヨコナデ、胴部外面にナデとヘラケズリ、内面をナデ上げとナデにより調整している。9は口径8.6cm、器高8.7cmで胴下半に焼成後の穿口を有する。調整はハケ目とヨコナデによる。胎土は精選されたものを使用し、焼成は普通である。

手捏土器(Fig.18—10)口径5.2cm、器高7.3cmである。底部は丸底で口縁部はわずかに内弯する。調整は主に指頭圧とナデによっている。胎土は精選された粘土を使用し焼成はあまり良くない。

高坏(Fig.18—11～14)14は坏部径19.8cm、器高13.9cm、脚部径13cmである。坏部はゆるやかに外反する。脚部中央に径0.5cmの焼成前の穿口を有する。坏部外面をハケ、ヨコナデ、内面をナデとヨコナデ、脚部をナデ上げとヨコナデによる調整を行っている。胎土は精選された粘土に細かな砂粒を混入し、焼成は良好である。

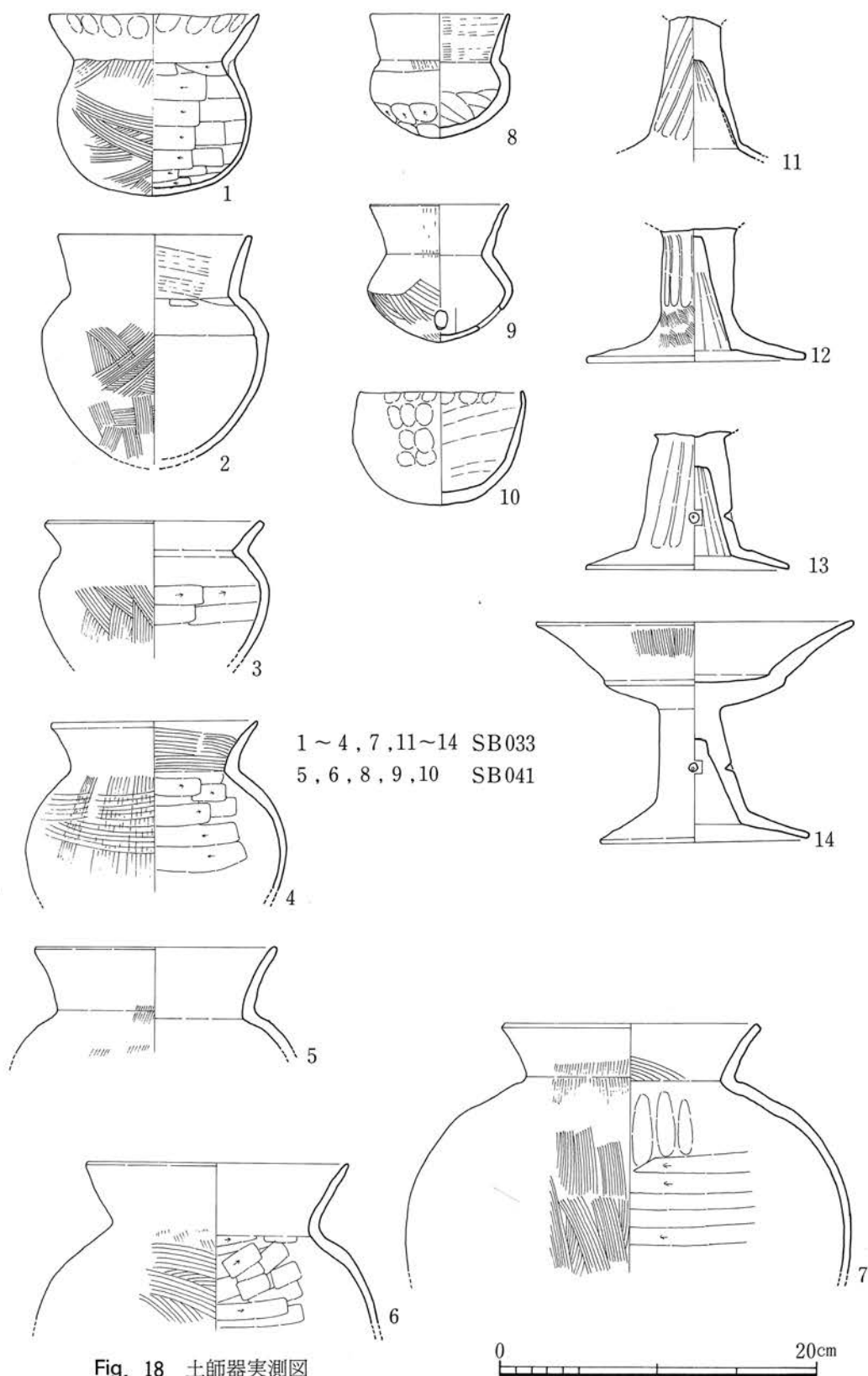


Fig. 18 土師器実測図

(3) 須 恵 器

須恵器は、ほとんどがSK003から出したものである。他にSK007、011、表土下層より数点検出したが、細片であったため省略した。器種は蓋・坏・高坏・鉢・甕があり、これらは法量・形態によって、いくつかに分けられる。

蓋A(Fig.19—1～3)口径13.5～14.2cm、器高は2で2.4cmである。3個体とも天井部に擬宝珠様の扁平なつまみのつくものとする。天井部は低く先端が下方に屈曲する短い口縁がつく。天井部外面は中心より約 $\frac{1}{2}$ までヘラケズリを施している。天井部の高さからすると、さらに1と2・3の間に一線を引くことができる。クロロ回転は右である。

蓋B(Fig.19—4～5)口径17～17.5cm、器高は5で2cmである。5は天井部にやや窪みを持ち宝珠を有する。天井部の高さはA類と大差なく、先端が下方に屈曲する短い口縁部がつく。クロロ回転は左である。

坏A(Fig.19—6・11)口径13～15.5cm、器高3.1～3.9cmである。口縁部はゆるやかに立ち上がり、わずかに外反する。調整は内外面共に主にクロロナデによる。

坏B(Fig.19—12・13)口径15.6～16.3cm、器高2.6～3.1である。12は内外面共に強いクロロナデを有し、口縁部はわずかに外反する。底部外面に稲主のヘラ描き文字を有する。

坏C(Fig.19—14)口径20.1cm、器高2.4cmである。口径の割に薄い。口縁端部はややとがりぎみでゆるやかに外反する。内外面共にクロロナデ調整である。クロロ回転は左である。

坏D(Fig.19—15)口径24.1cm、器高3.5cmで底部中央が少し窪んでいる。口縁部は比較的角度をもって立ち上がり、端部は丸みをおびている。口縁部内外面をクロロナデ、底部内面を不特定方向へのナデ、外面をヘラケズリにより調整している。

坏E(Fig.19—16・17)16は口径15.8cm、器高5.8cm、高台外径9.1cmである。口縁部はわずかに外反する。調整は内外面共に回転ヨコナデによる。17は口径17.8cm、器高4.9cm、高台外径6.7cmで底部外面に五月の墨書文字を有する。口縁端部は尖りぎみで内側にわずかに彎曲する。

鉢(Fig.19—18～20)調整・端部の形態が3種3様である。18は口径18.3cm、残存高10.6cmである。口縁端部は平坦でやや内側に彎曲する。調整は外部上半を回転ヨコナデ、下半を上方から下方に向けてのヘラケズリ、内面は回転ヨコナデと回転ヘラケズリによる。19は口径20cm、器高10.6cm、底径11.9cmである。口縁端部は丸みをおび外反する。調整は外面を主に回転ヘラケズリ内面を回転ヨコナデによる。20は口径22.7cm、器高11.8cm、底径12cmである。口縁端部は内側に傾斜し、稜を有する。調整は外面底部を除き、回転ヨコナデである。クロロ回転は左である。

高坏(Fig.19—21～23)23は坏部径14.5cm、器高12.6cm、脚部径10.7cmである。口縁端部は丸みをおび、坏部は浅い。調整は坏部から脚部外面にかけて回転ヘラケズリ、内面を主にクロロナデによっている。クロロ回転は左である。

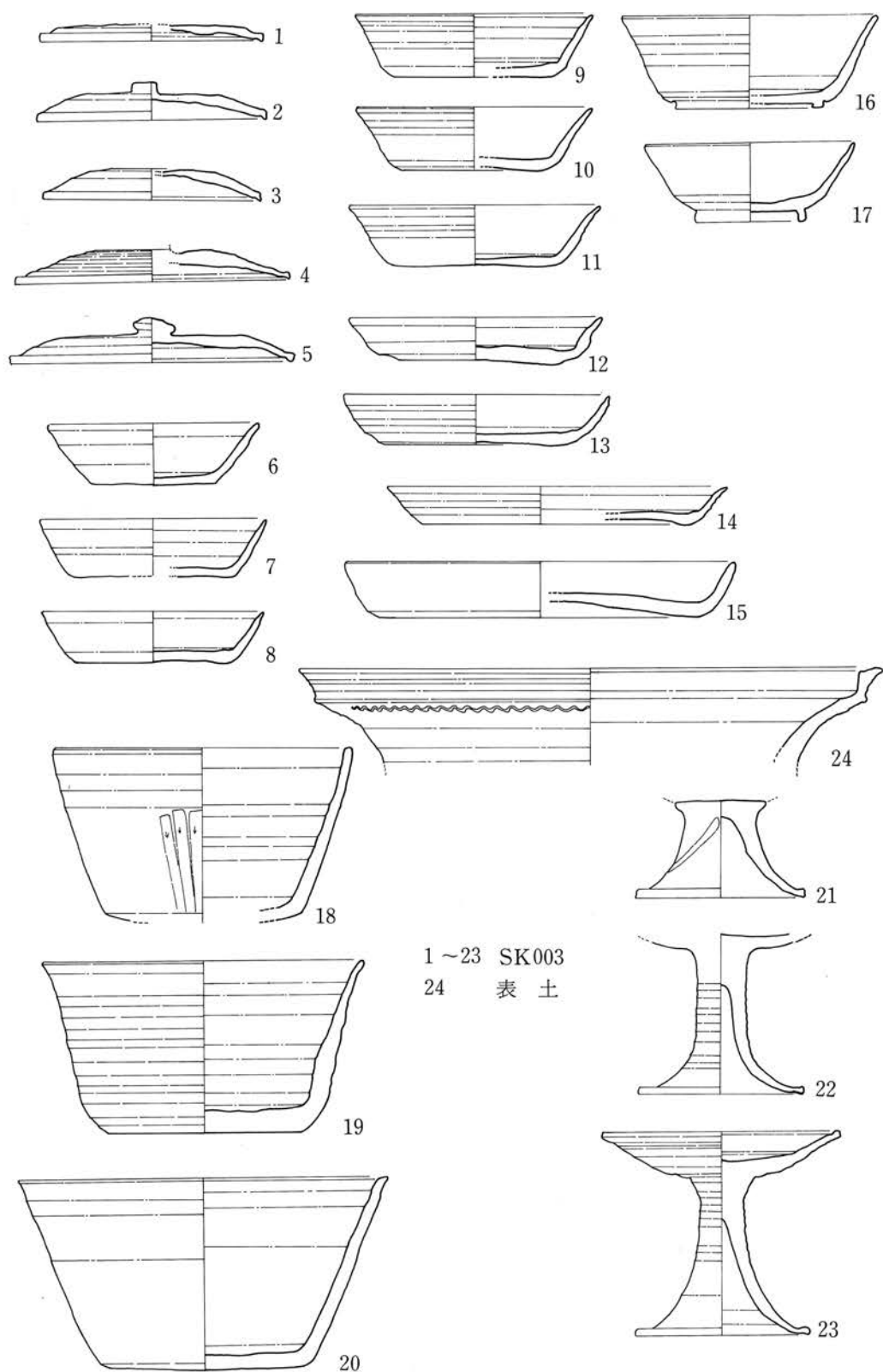


Fig. 19 須恵器実測図

甕(Fig.19—24)この個体のみ表土下層検出のものである。口径36cm、残存器高5.8cmである。口縁部外面にヘラ描きの波状文を一条有する。調整は主にロクロナデによる。ロクロ回転は左である。

2. 石器(Fig.20・21、PL17・18)

表土下層、住居跡の覆土より検出した。石材は、サヌカイト、黒よう石、凝灰岩、花崗岩、砂岩等で、器種は石鏃(1～4)、石匙(5)、削器(6)、石包丁(7～13)、砥石(14～18)、蛤刃石斧(21・22)、磨石(19・20)などがある。5は剥離面を刃に利用している。7は、SB002覆土より約3mを検出し、残りを約15m離れたSB038付近で検出した。19は全面を使用している。

Tab. 2 琵琶原遺跡出土石器計測表(単位:cm)

番号	器 種	出土地点	石 質	長さ	最大幅	厚さ	備 考
1	石 鏃	SB 009	サヌカイト	2.5	1.6	0.6	先端部を欠く
2	〃	〃	黒よう石	2.3	1.4	0.3	〃
3	〃	SB 008	サヌカイト	3.1	1.4	0.3	完形
4	〃	表土下層	〃	3.7	2.8	0.7	先端部を欠く
5	石 匙	SB 034	〃	4.8	6.0	0.6	
6	削 器	〃	〃	7.6	10.5	1.7	
7	石 包 丁	SB 002 SB 038付近	砂 岩 質	10.6	3.7	0.7	完形
8	〃	SB 024	凝灰岩質	8.4	4.5	0.9	1/2欠
9	〃	SB 032	〃	5.7	4.1	0.7	1/2欠
10	〃	表土下層	変成岩質	7.7	3.5	0.8	1/2欠
11	〃	〃	凝灰岩質	7.3	5.1	0.8	1/2欠
12	〃	SB 031	砂 岩 質	10.3	4.7	0.8	1/2欠、床直
13	〃	SB 009	凝灰岩質	4.3	2.6	0.5	1/2欠
14	砥 石	SB 019	砂 岩 質	10.5	2.9	2.5	2面使用
15	〃	SB 006	砂 岩	5.3	3.1	2.3	5面使用
16	〃	表土下層	砂 岩 質	8.1	4.1	2.0	3面使用
17	〃	SB 033	〃	7.7	2.7	1.5	2面使用
18	〃	SB 038	〃	10.8	8.2	1.3	4面使用
19	磨 石	表土下層	花 崗 岩	7.6	4.1	5.5	
20	〃	SB 002	〃	6.7	7.0	3.8	側面を磨いている
21	石 斧	表土下層	砂 岩 質	9.7	5.8	1.8	風化が進んでいる
22	〃	〃	凝灰岩質	6.3	4.9	1.5	

3. 鉄器(Fig.22、PL18)

主にSB033、SK003、表土下層より検出した。

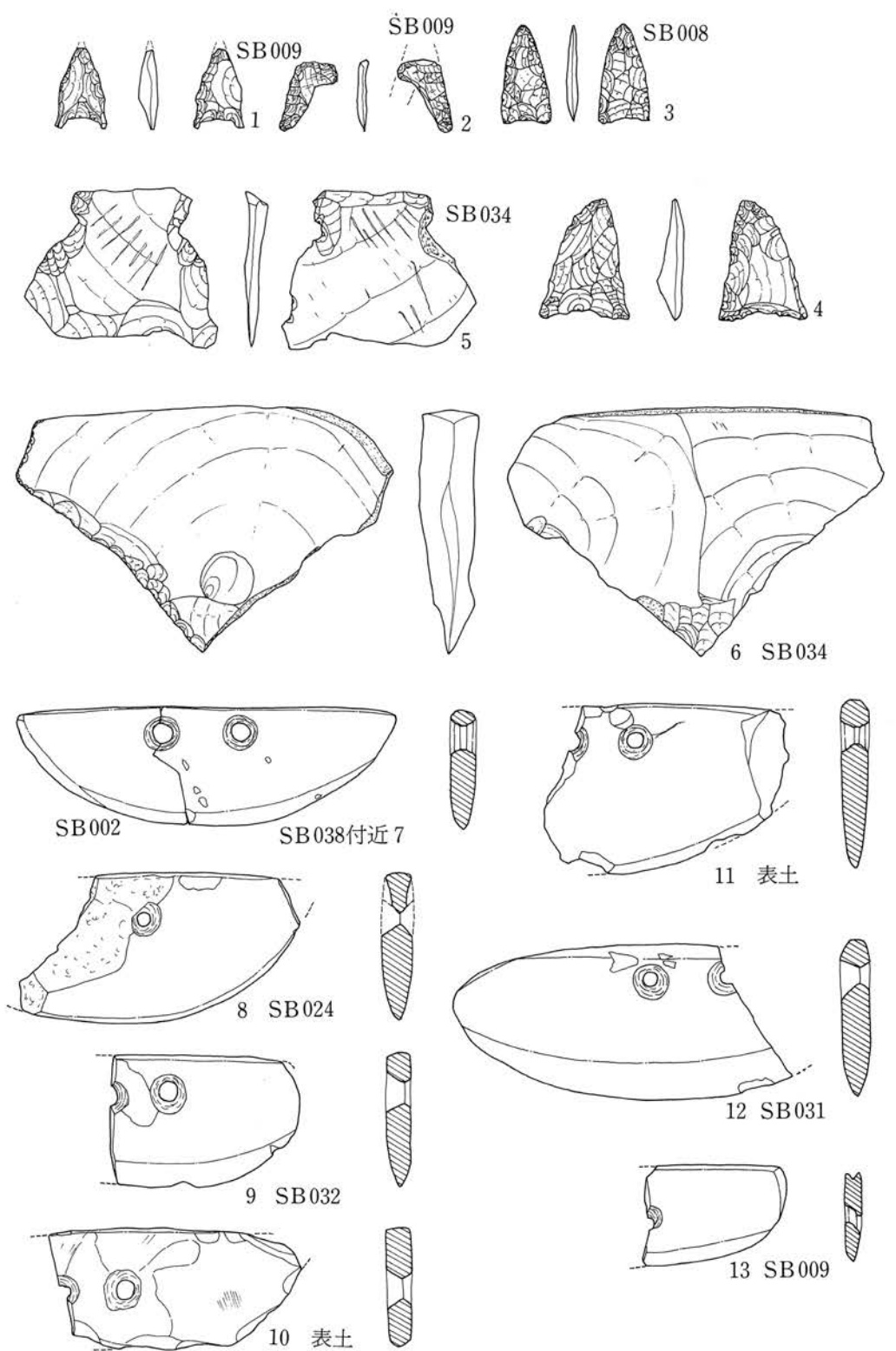


Fig. 20 石器実測図(1)

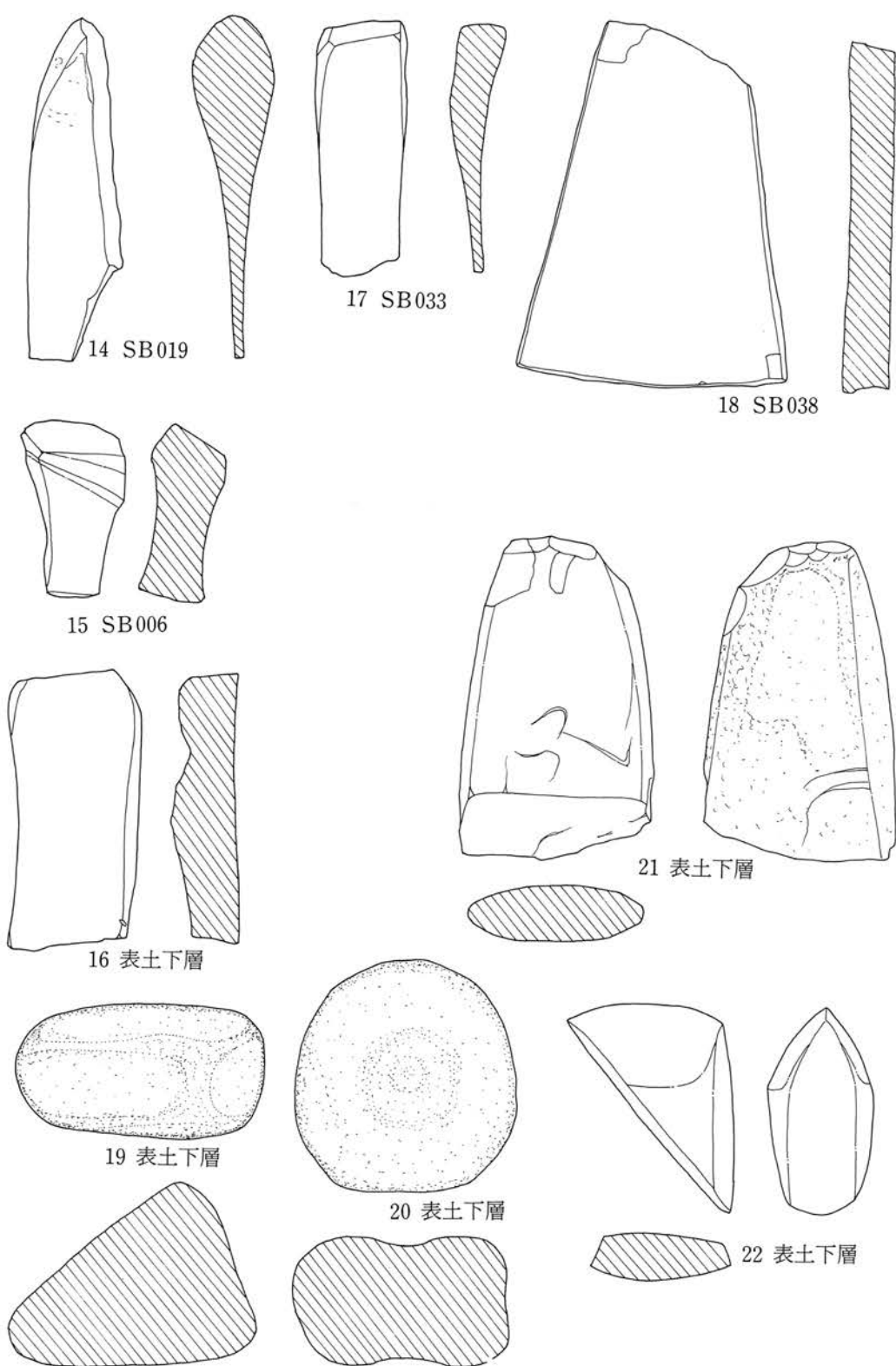


Fig. 21 石器実測図(2)

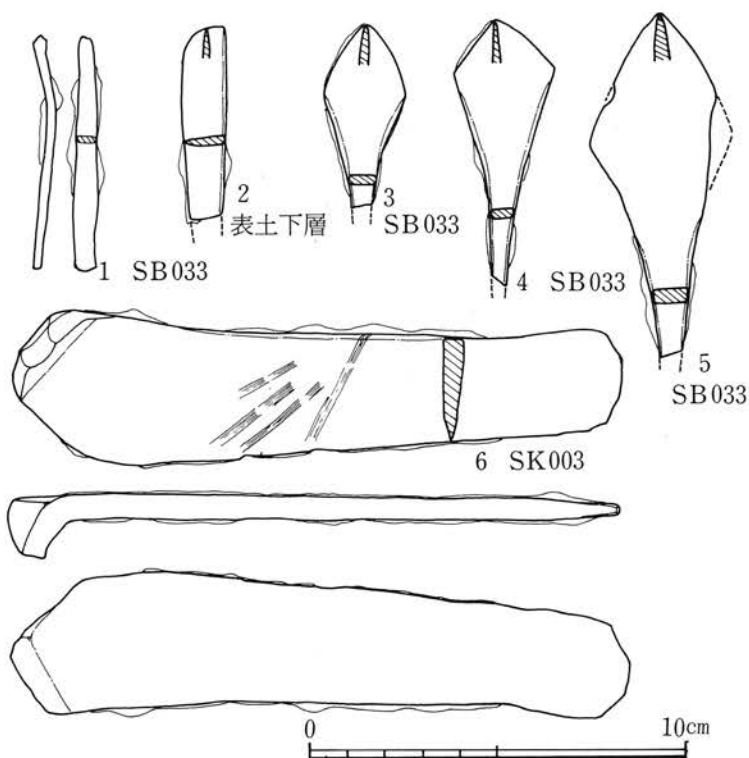


Fig. 22 鉄器実測図

不明鉄器(1)SK003より検出した。現存長6.2cm、幅0.6cmで断面は長方形を呈す。

刀子(2)表土下層より検出した。茎部を欠損し、現存長5.1cm、幅1.2cm、棟の厚さ0.2cmで先端部がわずかに広がっている。

鉄鏃(3～5)すべてSB033より検出したものである。3は現存長4.9cm、最大幅2.2cmで平造変形菱式に属する。4は現存長7.2cm、最大幅2.6cmで茎部がわずかに残っている。平造変形圭頭斧箭式に属する。5は平造菱式に属する。片側をやや欠損するが、現存長9.1cm、復元最大幅3.8cm、厚さ0.4cmである。

鎌(6)SK003より検出した。現存長16.2cm、最大幅3.6cm、棟の厚さ0.7cmである。端部を着装のため少し折り曲げている。自身中央に植物繊維が着付している。刃の位置と反りが逆である。

IV ま と め

琵琶原遺跡は西原集落の南部に位置する。当地域は古くから古墳の存在が知られているが、これは集落の北部一帯であり、南部の詳細については全く知られていなかった。

現在、西原丘陵は県道鳥栖・川久保線によって南北に分断され、北部は集落が密集しているが、南部は畑地も多く、比較的旧来の地形を残している。調査はこの畑地部分の約3,000m²を対象に行った。

今回の調査で明らかになった琵琶原遺跡は竪穴式住居53軒、土壇11基、溝4条、ピット等の各遺構からなっている。時期的には弥生後期を中心とする時期、弥生終末～古式土師を中心とする時期、5～6世紀、7～8世紀の4つの時期に大別できる。この中でいくつか問題点をしほり考察を加えていきたい。

まず、弥生終末～古式土師の時期である。この時期のものとして県下では、^①本川原遺跡、^②千塔山遺跡にみることができる。今回報告している土器の中には、両遺跡のそれよりも、より土師器的な色彩を多くもつものもいくらか見うけられる。例えば、SB030甕形土器であるが、胴部外面上半をタタキ、下半をヘラミガキ状のヘラケズリで消しており、全体に丸みをおびている。内面はハケ目を施し、ヘラケズリは見られない。厚さは3～4mmと薄い。

一時期、内面ヘラケズリの出現をもって土師器とするという考え方がなされていたが、それよりも古い段階の土師器の存在が認識されるようになった。例えば福岡県の^③狐塚のそれである。琵琶原のものと較べると少なくとも形状的には似通っており、平行するものという考え方もできるが、地域的な色彩を加味して考えるならば、我県下に於いては今のところ資料不足であり、今回は資料の提示に止めたい。なお、佐賀県神埼町に於いてこの種の土器の検出の報を聞いているが報告が待たれる。

次に、SK003出土の須恵器がある。これはFig (19—12)の坏で底部にヘラ描きで^④稻主（イナヌシ？）とあるもので、稻置（イナギ）を連想させる。この稻置は古代大和朝廷の地方官職名で、後に姓化するものとされている。語義については稻君説や稻霊招き説などがある。天武天皇13年（686年）の新しい8種の姓の制度に際しては、最下位の姓とされ、また地方では稻置代首・因支首のように氏名化するものという見方が一般的である。このことを考え合わせれば、首と主は意味的に共通したものがあり、稻主を稻置の別称もしくはそれに類する性格を有するものとするのできるのではないだろうか。なお、当丘陵中央部に於いて高床式とみられるピット群が存在し、この須恵器との関連を示唆するものかも知れない。

(注) ① 佐賀県教育委員会 『本川原遺跡』 1975

② 基山町遺跡発掘調査団 『千塔山遺跡』 1978

③ 筑後市教育委員会 『狐塚遺跡』 1970

④ 吉川弘文館 『国史大辞典』 一卷

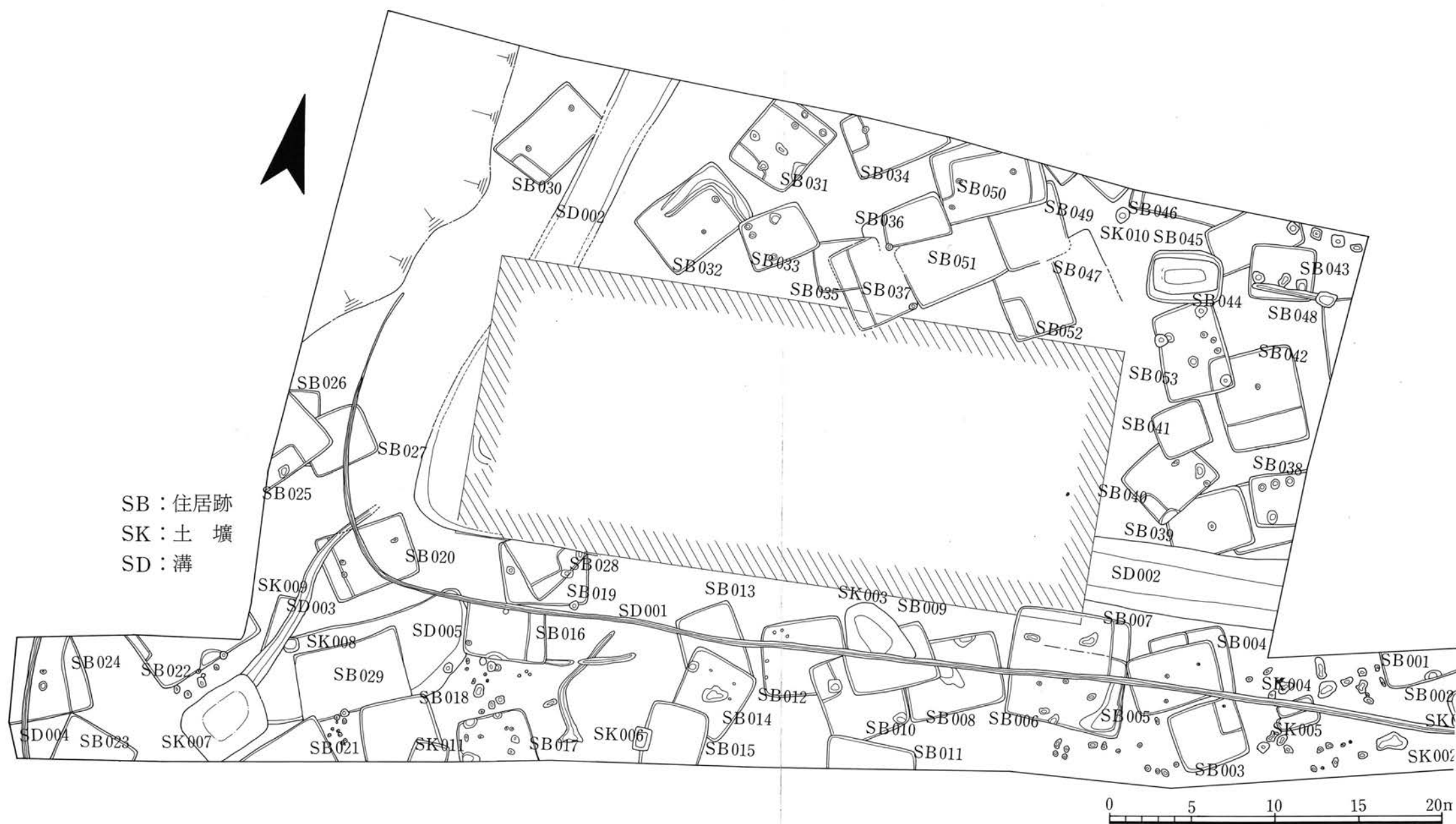


Fig. 23 琵琶原遺跡遺構配置図

版 圖



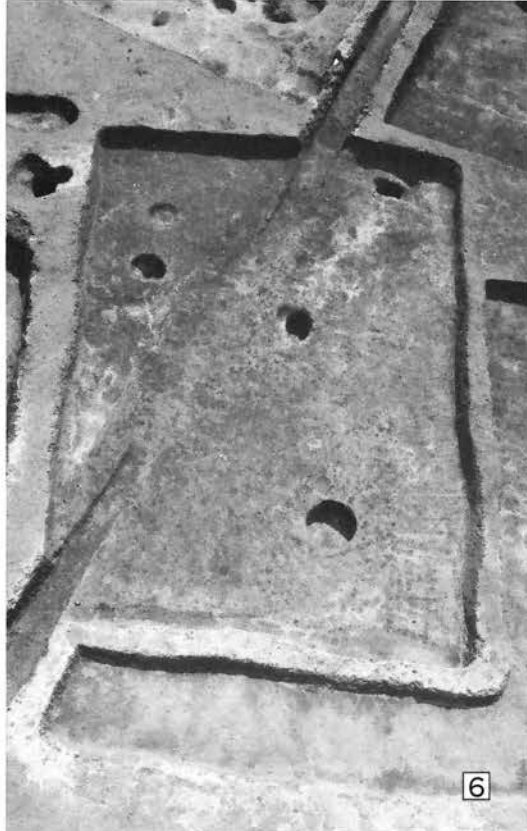
1. 調査区東北部遺構検出状況
2. 調査区北部遺構検出状況



3. 調査区南西部遺構検出状況

4. 調査区南部遺構検出状況

5. 調査区南東部遺構検出状況



6. SB005住居跡

7. SB031住居跡

8. SB034住居跡



9. SB031土器出土状況

10. SB006土器出土状況



11. SB030土器出土状況

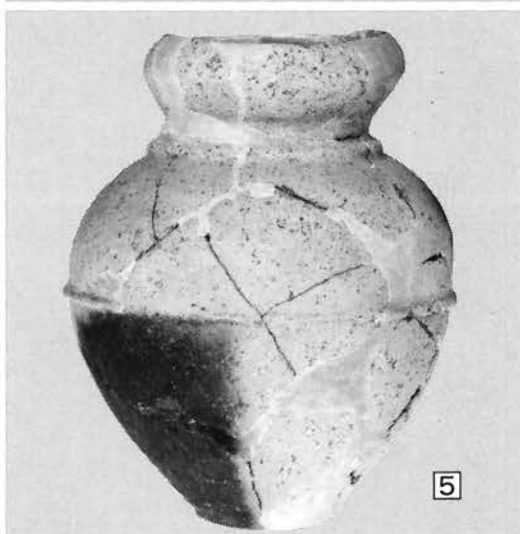
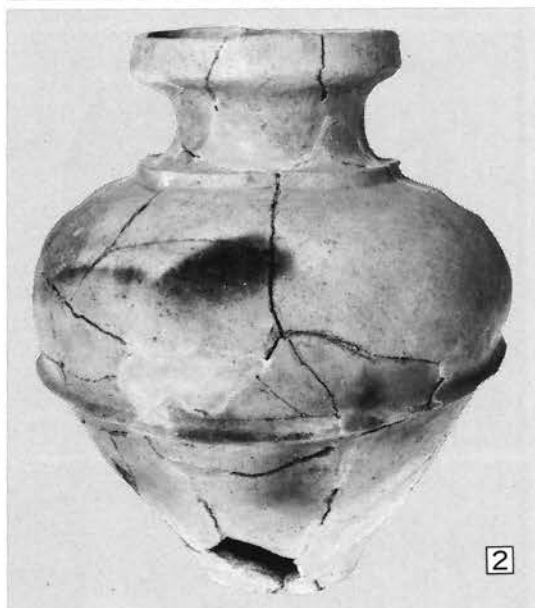
12. //

13

14

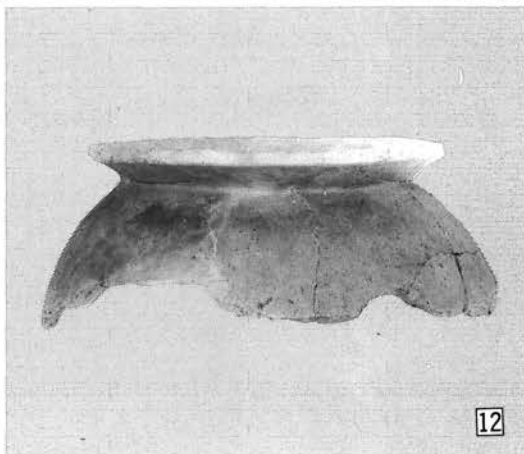
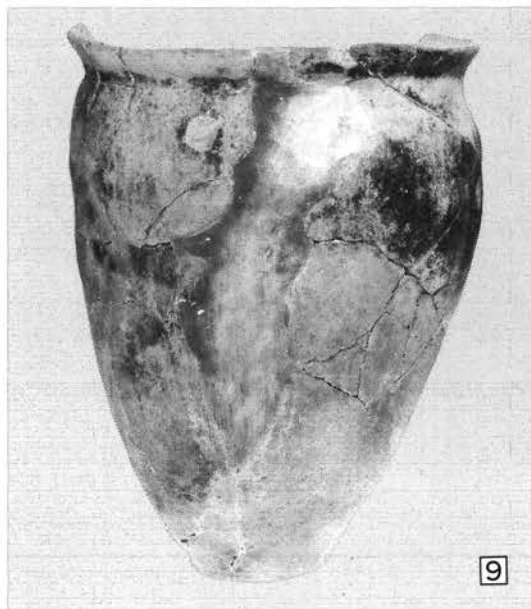
13. SB033住居跡

14. SB033土器出土状況



1 ~ 5 SB023

6 SD007



7, 9~12 SB023

8 SK010



13



16



14



17

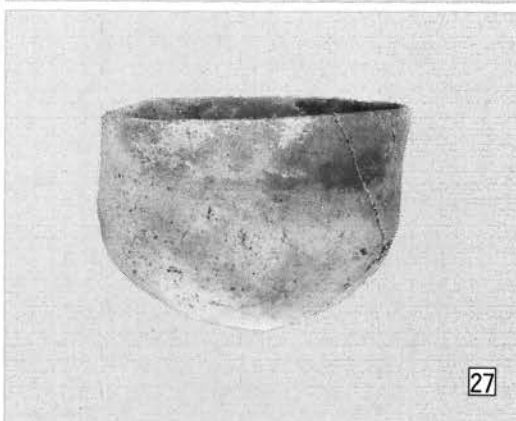
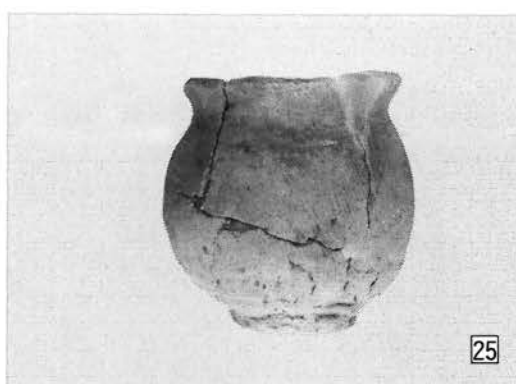
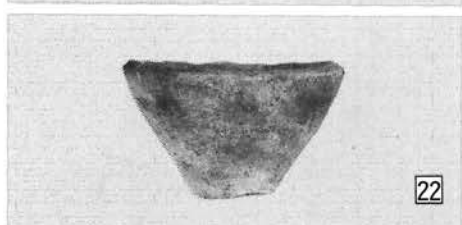
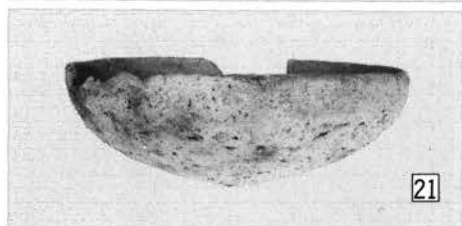
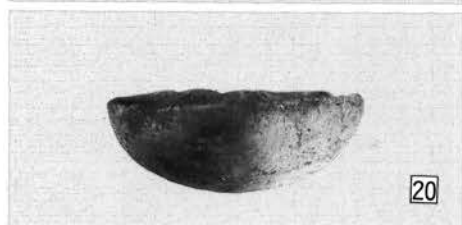
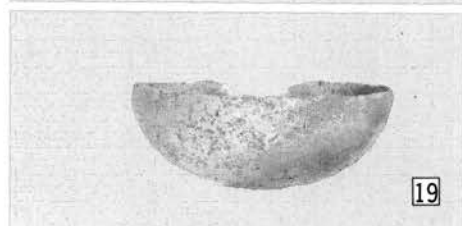
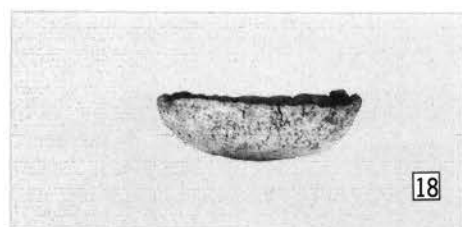


15

13, 14 SB006

15 SB016

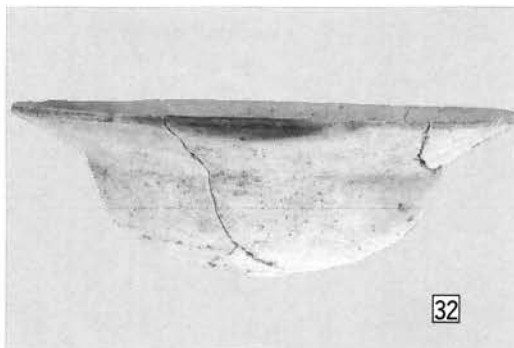
16, 17 SB030



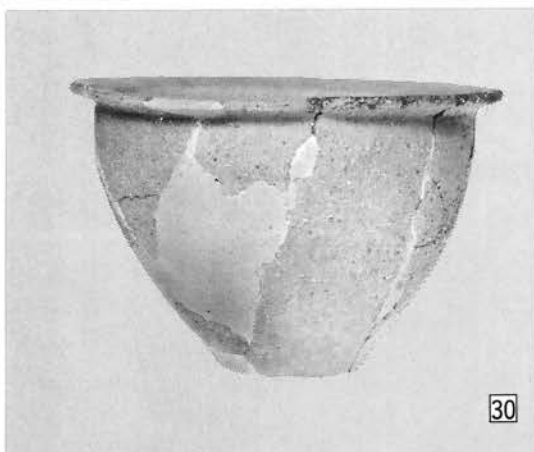
- | | | | | | | | |
|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 18 | SB011 | 21 | SB050 | 24 | SB031 | 27 | SB030 |
| 19 | SB052 | 22 | 表土下層 | 25 | SB032 | 28 | SB006 |
| 20 | SB019 | 23 | SB014 | 26 | SB014 | | |



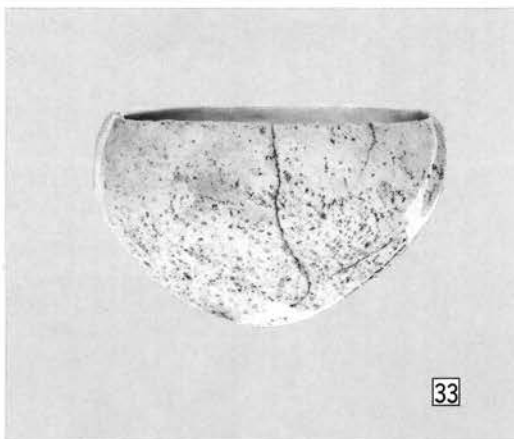
29



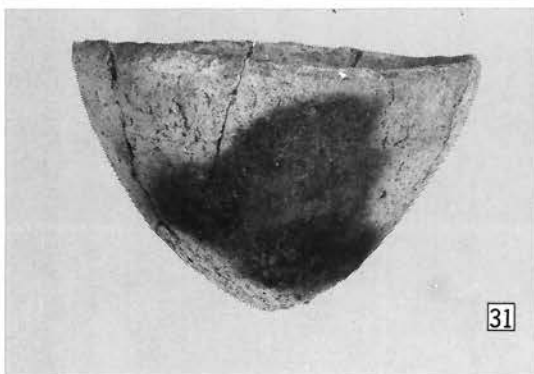
32



30



33



31



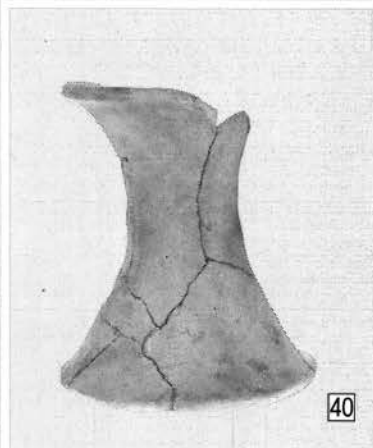
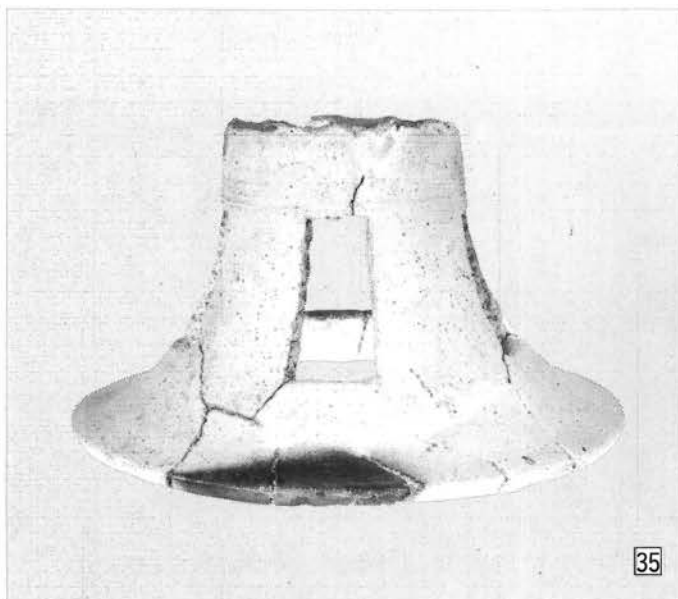
34

29, 30 SB023

31 SB006

32 SB028

33, 34 SB030

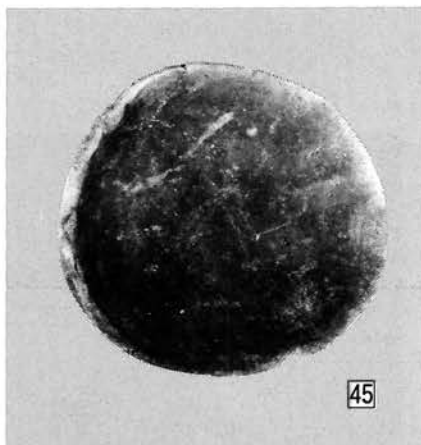


- 35 SB031
- 36 SB051
- 37 SB009
- 38 SB015
- 39 SB006
- 40 SB023
- 41 SK008





42



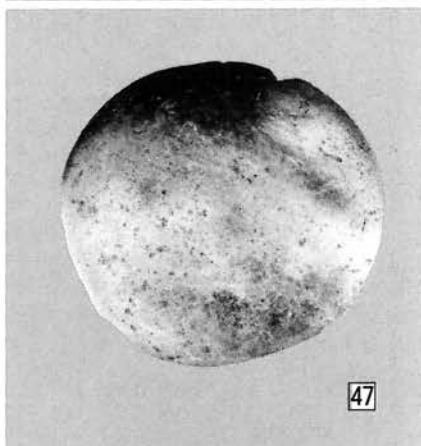
45



46



43



47

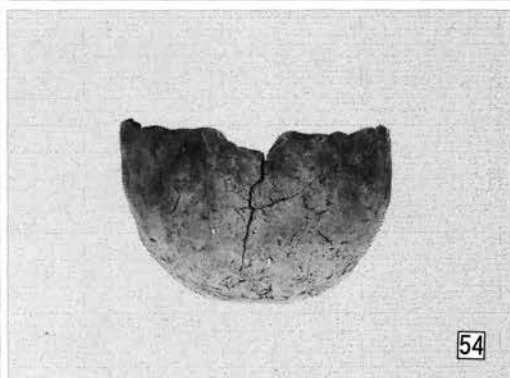
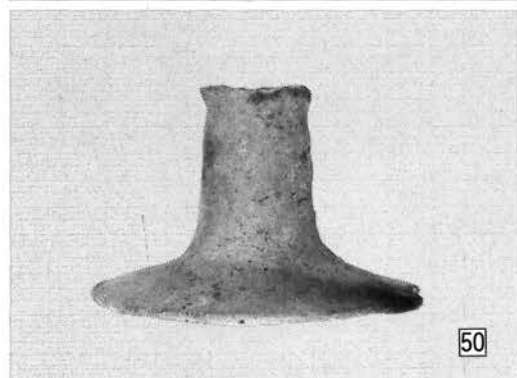
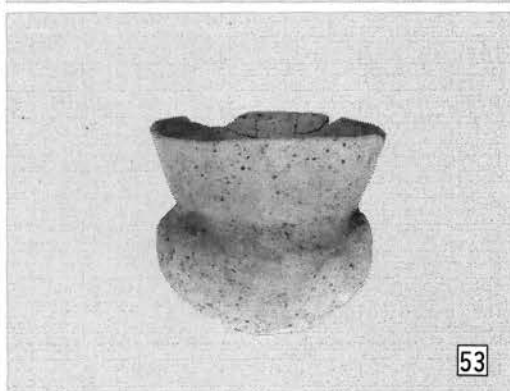
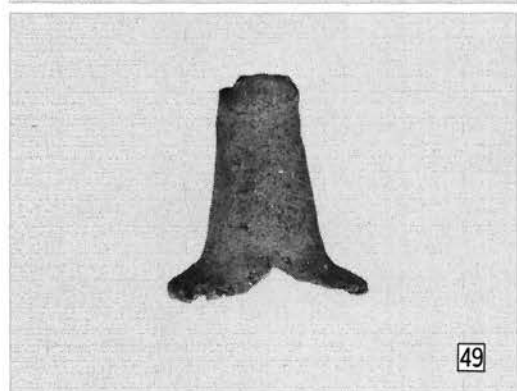
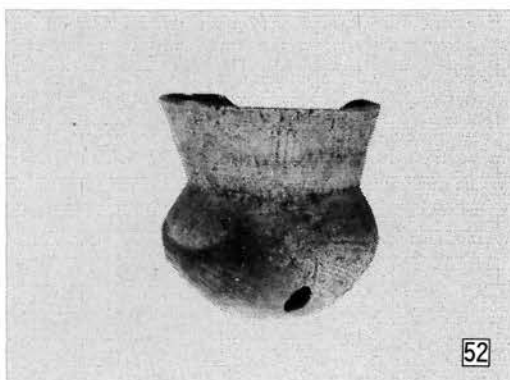


44

42, 43 SB023

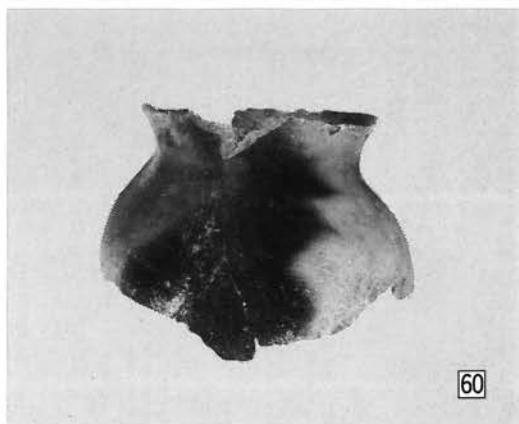
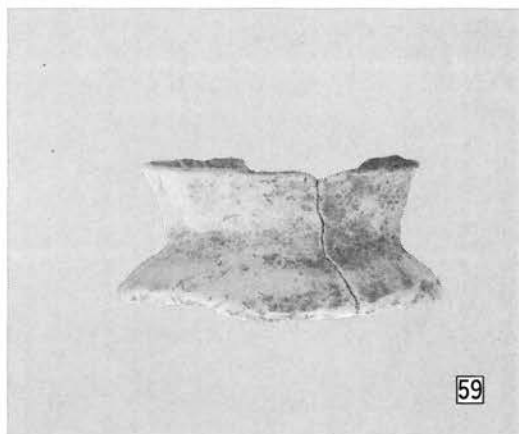
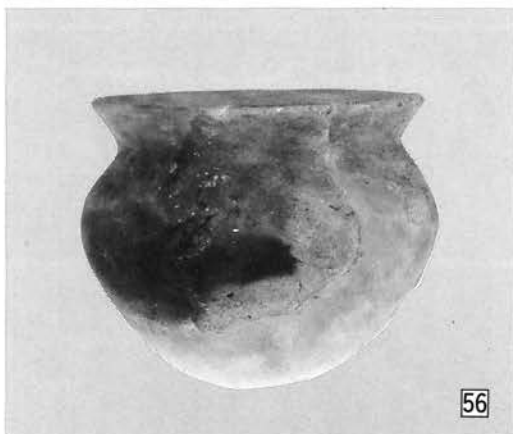
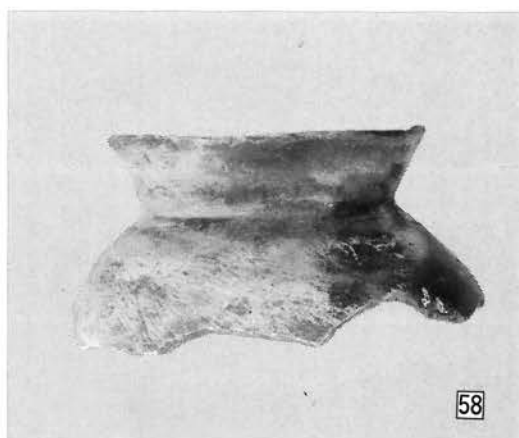
44 SK003

45~47 SB027



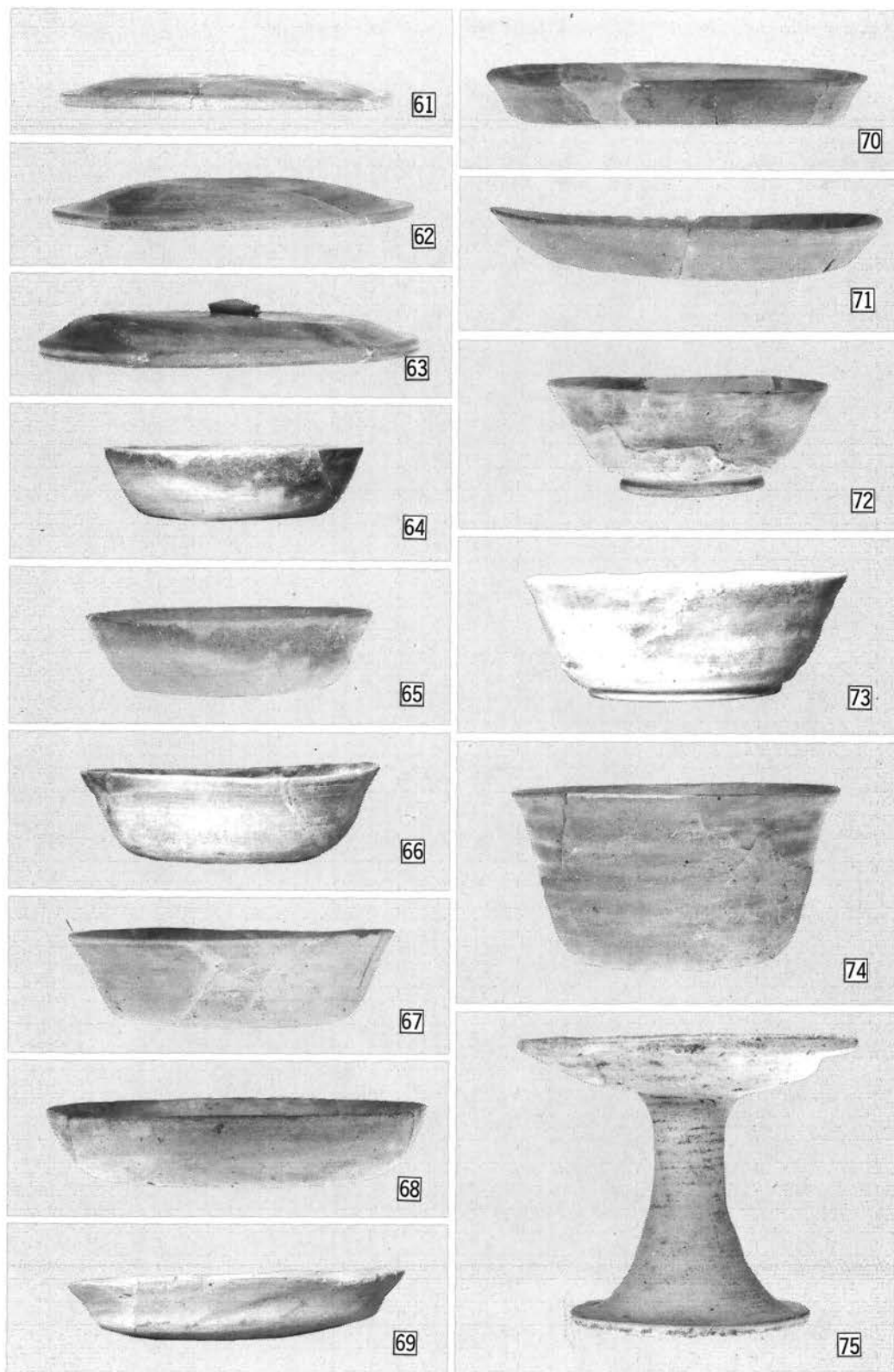
48~51 SB033

52~54 SB041



55~57, 60 SB033

58, 59 SB041



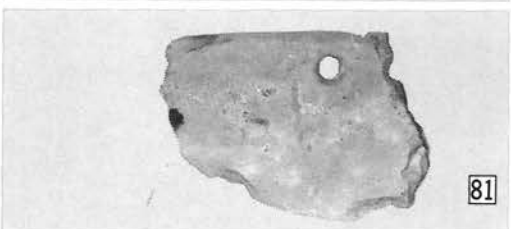
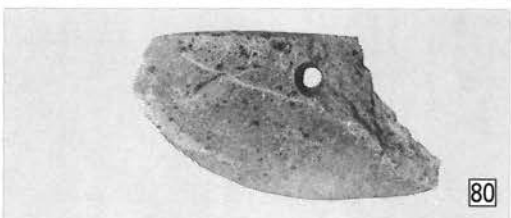
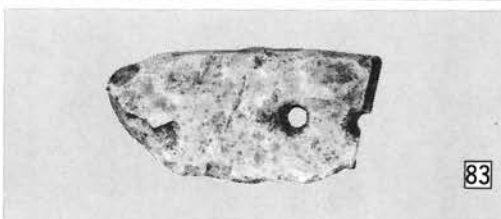
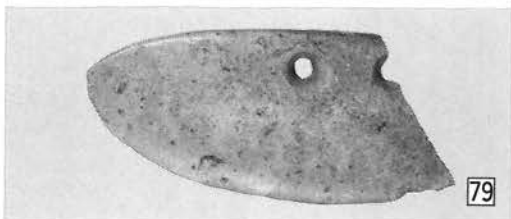
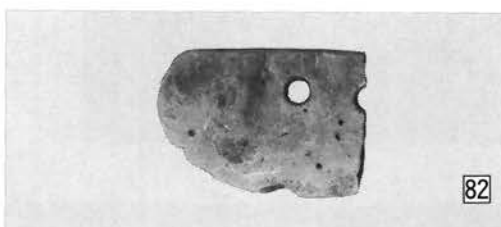
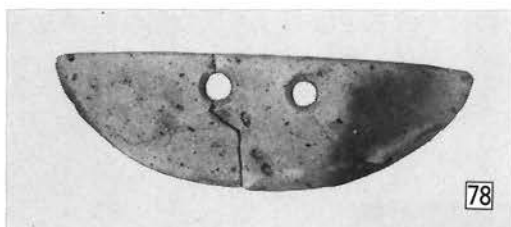
61~75 SK003



PL. 16 69の底部



PL. 16 72の底部



78 SB002 , SB038 付近

79 SB031

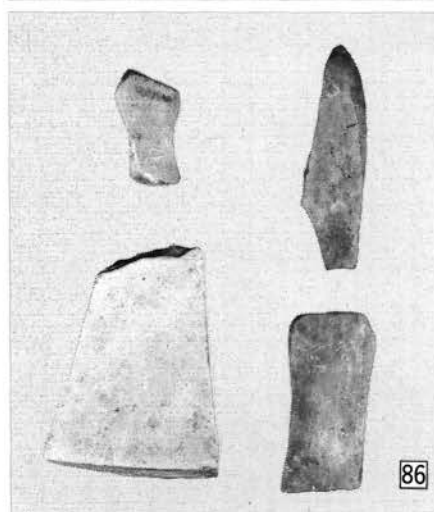
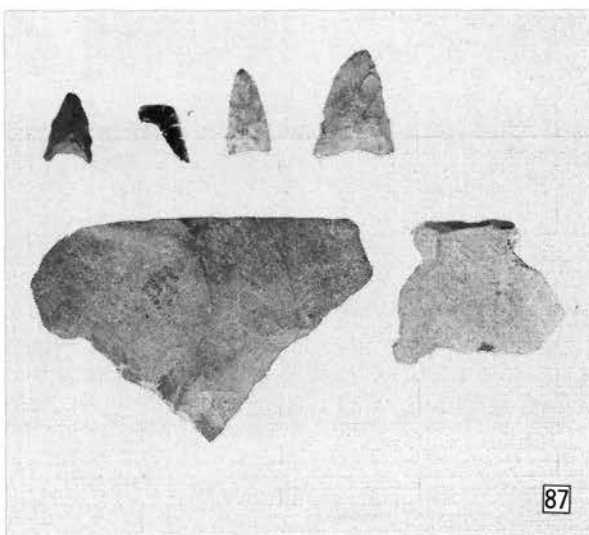
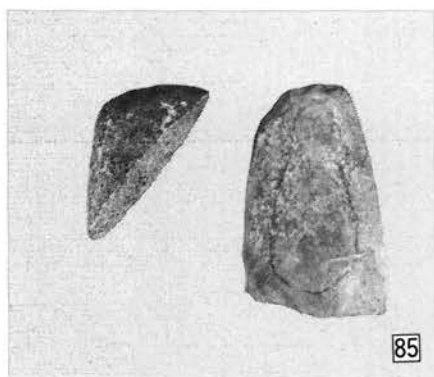
80 SB024

81 表土下層

82 SB032

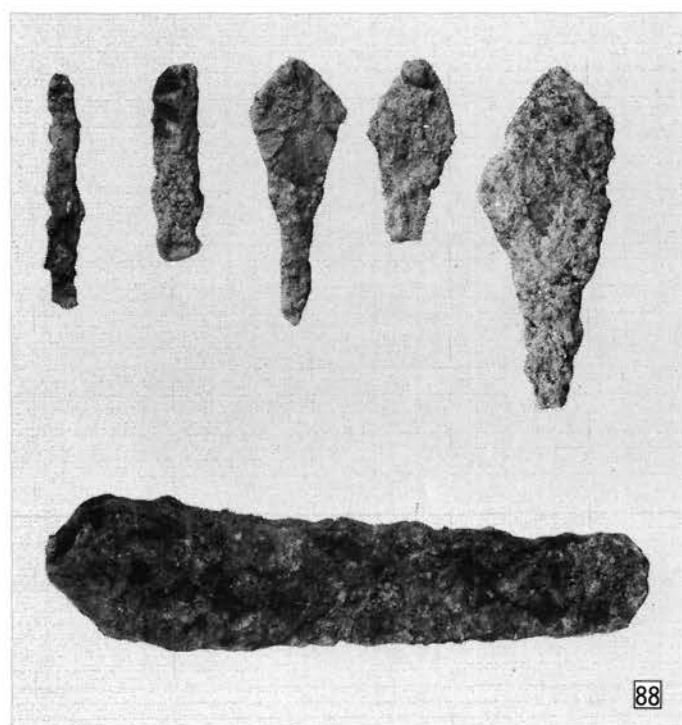
83 表土下層

84 SB009



85, 86, 87 琵琶原遺跡出土石器

88 同 鉄器



佐賀市文化財調査報告書第13集

琵琶原遺跡

昭和 56 年 3 月 31 日

発 行 佐賀市教育委員会

佐賀市神野町 331-3

印 刷 佐賀印刷社

佐賀市高木瀬町長瀬1136-54